



あゝ信州よ山の国 誇りは高しアルペンの  
峯に輝く雪を以て 希望は高いや更に  
さらば歌はむ諸共に 若き血潮のゆくまゝに  
あした夕べの友は山 山は我等の姿なる  
山は我等の姿なる

思誠寮々歌

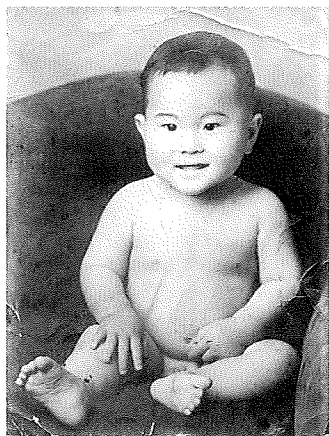
## 寺田雅治さん追悼



カリガンダキ溪谷・ガーサ村にて

- |             |  |
|-------------|--|
| 昭和15年6月26日  | 京都市で生まれる   |
| 昭和35年4月     | 信州大学農学部林学科入学<br>信州大学山岳会伊那松本山岳部入部                       |
| 昭和39年3月     | 農学部、山岳部とも無事卒業<br>以降、京都北部の山々を中心に自然に親しみ<br>花鳥風月に造詣を深化させた |
| 平成 6年4月     | ネパール・ランタン谷トレッキング                                       |
| 平成16年7月     | チベットトレッキング   |
| 平成21年9月     | 信州大学60周年事業<br>アンナプルナ山群一周トレッキング副隊長                      |
| 平成21年10月19日 | 日本帰国後 JR車中で死亡<br>享年69歳                                 |

## 寺田雅治さんの思い出



赤ちゃんの頃



幼少時代、後列右



上高地サマーテント  
出会い  
前列右 恵子夫人  
後列右 寺田さん



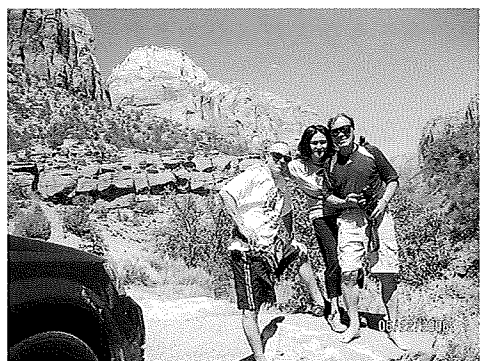
農学部西駒演習林でめでたく結婚式。仲間の祝福を受ける



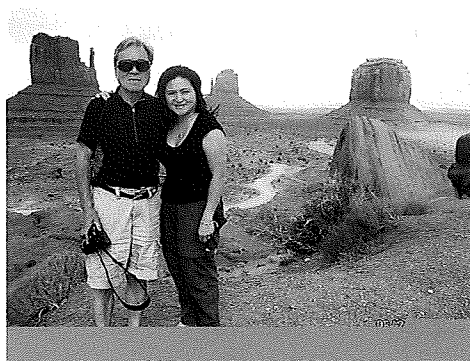
バリバリ仕事をしていた頃



雪の城で片桐家との出会い



ジョン、晶子夫妻とアメリカで



晶子さんと



満67歳の誕生日を家族に祝ってもらって

## 寺田雅治さん追悼文

松尾 武久  
(第三チーム 隊長)

寺田さんのお付き合いが始まったのは何時頃からだろうか。

私が山岳部に入部した昭和36年度は松本山岳部と伊那山岳部に分かれて活動していたので、伊那山岳部に所属していた寺田さんとは面識が無かった。一年部員の春山合宿は松本山岳部と伊那山岳部の合同合宿で、中央アルプスの空木岳から木曾駒ヶ岳までの極地法合宿だった。そのときが初めての出会いだった。確か木曾殿越に寺田さんと私と同期の故浦さんが居て、男前の怖そうな人だったなどの記憶がある。

その後、両山岳部が合併して伊那・松本山岳部となってから一緒に合宿に参加するようになった。前穂高岳奥又白合宿では北尾根三峰リッジでザイルを組み、「お前はなかなかバランスが良い」と褒められたことを思い出す。

私は松本に住んで居たが、伊那の町へ行くと「緑の館」と称するオンボロ軒屋に葛西さん、池田さん、寺田さんが住んでおり、食事もありつけるのでよくお邪魔したものだ。周りが畑だったので野菜関係は何故か困らないといった環境で、後は肉類が農学部の実験材料の残りでも手に入れば最高の食事にあっつた。

私は滋賀県大津出身で、寺田さんは京都市出身ということで、関西は日本文化の発祥地であるとか何とか言いながら、ことあるごとに可愛がってもらった。

卒業してからはお互い仕事に忙しく、家庭も持った関係でお付き合いも疎遠になっていたが、時折乗鞍高原の「フレンズ岡崎」や「穂高の小川・扇能山荘」で顔を合わせるたびに酒の手ほどきを受けた。寺田さんは本当の酒豪であったが、酔いが廻ってくるとますます楽しくなる酒だった。あらゆることに造詣が深く、特にきのこや山菜、林学あるいは歴史のことは話し出すと止まらないので、ただ拝聴するだけであった。最後は松本高校思誠寮の寮歌と山の歌を唄って必ずお開きとなるパターンだった。

45年ぶりの「伊那松本山岳部の報告No2」の編集、故小川勝さんの追悼集「嶺を超えて」の発刊の頃から頻繁に会うようになり、いつも暖かいサポートをして頂いた。今回の60周年事業についてもその姿勢は全く同じで、実行委員長の私を絶えず応援して下さったことについては心から感謝しているし、その後押しが無ければ任務を全う出来なかったかもしれないと思っている。



アンナプルナ山群一周トレッキング隊では、副隊長・医療担当として万全を期してもらった。特に医薬品については、事前の研究もきめ細かく行われ、ドクターの居ない第三チームとしては心強い限りであった。トレッキングに入ると、5,416mのトロンパスを越える前半行程は体調が余り良くなく、事前合宿に参加していたメンバーから心配の声が上がるほどであった。しかし、トロンパスを越えてからは本来の力強さが戻ってきて、いつも隊の先頭を快調に歩く姿が見られるようになって、隊員からも「寺田サーブ、速すぎますよ。ビスタリ！ ビスタリ！」という声がかかるほどであった。

また、この第三チームはサーダーをして「こんなに酒を飲む隊は見たこと無い！」と概嘆させたほど毎晩楽しく飲んでいて、その中でも寺田さんはトップクラスの酒豪であり、最後はテーブルに頭を着けて寝てしまうことが度々あった。昔の寺田さんはそんなことは無かったので、さすがに弱くなっているなど感じたものだった。

日本への帰路、寺田さんは関西空港へ私は成田空港へと香港で別れることになった。

「またヒマラヤへいきましょうね。また信州でお会いしましょう」と固い握手をしたのが最後だった。その夜の息子さんと奥さんからの電話は信じ難いものだった。JRの特急「はるか」の中で死んでしまうなんて……。せめてご家族の待っている自宅まで帰ってほしかった。そしてお土産をご家族の皆さんへ渡して欲しかった。寺田さん！ 何故、何故、そんなに急いで逝ってしまったのですか。

今から思うと一ヶ月近くのネパール滞在が身体に影響していたのだろうか。いや

いや写真で見る寺田さんの顔はそんな気配は感じさせない素晴らしい笑顔だ。きっと下界の飲み仲間よりも天国に居る山岳部の飲み仲間と飲んだ方が面白いと思ったに違いない。今頃は肩を組んで「春寂寥」「雲にうそぶく」を高らかに唄っている姿が目につく。

寺田さん！ これからも信州大学学士山岳会と我々仲間を見守ってください。アヲヨ！



10月17日の打ち上げパーティーでご機嫌な寺田さん

## 寺田さん追悼

小原 武  
(第三チーム 隊員)



トレッキング初日の朝、ベシサールのテント場で

このトレッキング全行程に於いて、小生と、テント、ホテルで同室、行動を共にし、何かと、年配の小生に対し、体力、行動に就き気配りをして呉れた寺田雅治さんに対し、ここに改めて心から哀悼の意を表したいと思います。yakカルカ到着の日も、レダール到着後の高度順応目的のyak放牧の丘への散歩も体力不調とのことでキャンセルし、テントサイトで、小生の覚束ない足取りを遠望していたと小生の帰着後、笑って語って呉れた事を思い出します。京都の

自宅まで、もう少しのところまでたどり着き、敷居を跨ぐことが出来なかったこと、残念でなりません。

## 寺田雅治君 追悼

奥嶋 啓志  
(第三チーム 隊員)



寺田雅治君、長い間お付き合いさせて頂き、有難うございました。

昭和35年4月信州大学農学部入学、昭和39年3月卒業の同時入学同時卒業の仲間でした。

この写真は卒業式後、農学部の伊那山岳部部室前での撮影写真、(農学部体育館の入り口に部室があった)寺田雅治君、小川永行君の母親、小川永行君、加藤龍一君、奥嶋 啓志。すでに、小川、加藤の両君は他界し、この度、貴



君まで他界した。私一人になってしまった。

この写真を見て、懐かしく山岳部現役時代の思い出話が出来たのに、残念です。

彼は、大学時代は山岳部に飲み会部に大活躍でした。勉学の記憶は残念ながらありません。（4年で卒業された事はそれなりに努力されたのですかね？）

下界では、毎日のごとく数名と“つるん”で飲んでましたね？ 私が飲みに行く  
と必ずお会いした様な気がします。



山行では、私に会うたび彼が私の凍傷した鼻を舐めた逸話を聞かされました。私は鼻の凍傷では無く、耳だ、“鼻を舐めてもらった記憶はない、冗談じゃないよ”と会う度に言い合いをしたものですね。

この出来事は昭和36年冬山合宿の出来事でした。燕岳の稜線で風と寒気が吹き込み猛烈な寒さを記録した年で、殆どの部員が凍傷を負った。



また、この記念撮影の6名の内すでに彼方を含め3名が他界していることに気がつきました。年数を感じます。

卒業後は小生が会社勤めで、鹿児島、東北へ赴任し京都住まいの彼とは20年弱お会いする機会がありませんでした。

小生が、東京に赴任し、乗鞍へ通うようになり、正月や5月の連休に再会するようになりました。

乗鞍での最初の再会はお互いに子供連れで、まだ子供が中学生であったように記憶してます。その子供たちもすでに独立して、おじい様になりましたね。

平成17年5月には私が定年後四国で高齢者福祉施設を立ち上げ、施設の建設直後で、まだ開業前にご夫妻で立ち寄っていただき、松尾君と共に雨の中の石鎚登山が



忘れられない思い出となっております。

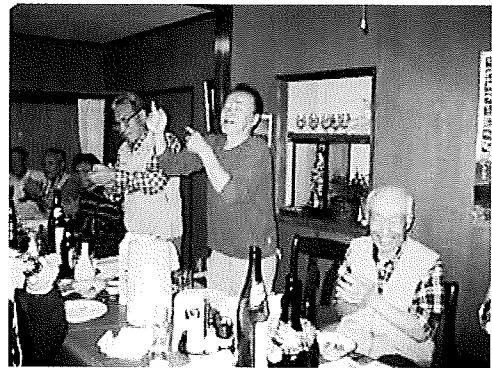
今回の信州大学60周年記念事業参加にあたり小生が長期に私の会社を留守に出来なく迷っていました。その時期電話、お葉書を頂き一緒に参加するようお誘いを頂きました。

我が息子が7月より私の仕事を手伝う事が決定し、お陰で喜んで参加できるようになり感謝しておりました。

平成22年1月28日



徳本合宿 小屋前の記念撮影



合宿後の乗鞍ふれんず岡崎でのひと時

## 寺田雅治さんの思い出

川崎 誠  
(第三チーム 隊員)

ネパールヒマラヤトレッキングから帰国した翌日に寺田さんの訃報を聞いた時はあまりに急で、これは事故か事件に巻き込まれたのではないかと思いました。

彼とは1960年4月に信州大学農学部林学科入学以来ほぼ半世紀のお付き合いになります。

関西弁や関西人気風がが関東育ちの私には何とも珍しく感じられました。同級生とは言っても1年生の頃は授業は大教室での講義でありそれもお互いに出席常ならず、寮生活の彼とは交友関係も異なり初めは個人的なつながりは特に強くはありませんでした。

繋がっていたのは同じ山岳部活動を通してです。酒が強くてヘビースモーカーだしいろいろなことをよく知っているの随分大人に見えました。モクモクと煙を吐



いているのでついたあだ名はモクさんです。そんな彼から見れば私なぞ頼りなく危なっかしく見えたのでしょう。いろいろとを注意されたりよく教えられました。

3年生の時は農学部の子岳部チーフリーダーとして活躍し、当時は山岳部活動が盛んで大量に入部してきた1年生の指導や、学部毎だった山岳部活動を統合する活動に力を発揮していた。

4年生の時には同じ造林学研究室で奥秩父へ行き金峰山、国師岳あたりの調査に歩きまわりました。傾斜地や沢筋など危なっかしい場所では彼の活躍です。先生たちには「こうなると山岳部の出番だな」と頼もしがられたものです。

そんな指導力、行動力を実社会で遺憾なく発揮して多くの後輩を育てたり世代の違う仲間を結びつけてくれました。実業家としての手腕を聞いたのはずっと後のことです。

卒業後に会うことはあまりなく年賀状のやり取りくらいで交友が復活したのは最近のことです。彼が中心になって呼び掛けて学部の同期会が始まりました。

酒豪、健脚ぶりは相変わらずで子供さんやお孫さんのことを嬉しそうに話す姿は



プーンヒルにて山岳部同期生

全くの好好爺でした。これから残りの人生を楽しむ時期の急逝はさぞ残念だっただろうと思います。せめて一晩だけでもご自宅で風呂に入りゆっくりと夫婦水入らずで過ごしたかったろうに、運命の神は時として残酷なことをするものです。

あの世とやらでは仲間を集めて楽しんでいることでしょう。ご冥福を祈ります。

## 寺田さんを偲んで

板谷 真人  
(第三チーム 隊員)

こんな事を書くことが有ろうか、未だに現実とは信じられない。

トレッキング中の寺田さんは何時も元気に前の方を歩かれ休む度に周りの景色や植物の事を京都弁で話されていたのを思い出します。

寺田さんとは山岳部入部で出会い共に出身が京都で京都弁がよく話が出来た。

同じ京都でも伏見の南のほう出身の自分では理解できない京都の深い所をよく知っておられていろいろ教えてもらうことが多かった。又今離れて住んでいる自分に今の京都の様子を教わる貴重な先輩で何かで京都へ行くときはお会いするのが楽しみでした。

ここ数年毎年五月末の「懐かしの徳本峠」山行を一緒に行けるのが楽しみで体力的には我々熟年組のトップで何時も峠到着が一番だった。



事前合宿、乗鞍岳山頂直下で

「昔むかし」の学生時代一緒に中央アルプス中田切川を遡行した時を思い出します、途中で夜になりちょっとした谷のテラスでビバークしたときに今の奥さんの話を聞いた思い出があります。

寺田さんには寺田さんの会社の社員で急逝した古い山仲間の牧君の墓がある相国寺に案内してもらったのにこんなに早く牧君のそばに行かれる結果になろうとは誰が想像できたでしょうか。

残念でなりません……合掌……。

## 寺田さんを偲ぶ

柴田 武明

(第三チーム 隊員)

寺田さんは何を思って永い眠りに入ったのだろう。長年の願望であったヒマラヤアンナプルナトレッキングを学生時代の古い仲間と楽しく行けた事で大満足しての安らかな眠りか!!

“やったー、やったー、おれはヒマラヤトレッキングで、5,416mの峠を越え、無事家に帰ることが出来る。この電車は京都行き、着いたら家だ、もう直で家に到着だ……。

おれは頑張ってきた。このトレッキングにあわせ、片足5kのウェイトを着け一時間半歩く、それだけ鍛えたのだ。標高の高いヒマラヤ、急いではいけない、ピスターリ、ピスターリ、マイペースで歩くのだ、と自分に言い聞かせながら歩いた。標高が上がるにしたがって思うように足が進まず、ピスターリで歩いた。こんなは



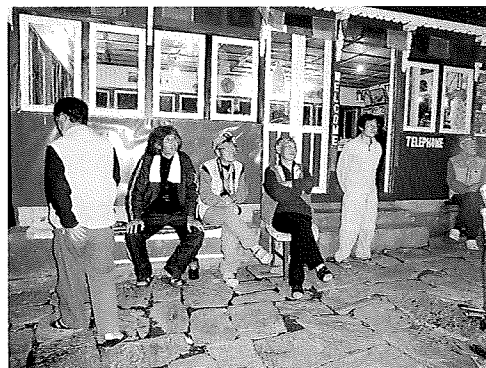
トロンパスを越える寺田さん

ずではないと思ったが、焦ってはいけない、マイペースで、マイペースで、ピスターリ、ピスターリ。それでも5,416m トロンパスを自分の足で越えることが出来たのだ。登りはきつかったが、降りには自分の本領、皆の先頭を切って歩いた、ようやく自分流に歩くことが出来たのだ…。おいしいロキシーも飲み、古い山仲間と楽しく行くことが出来た……。

もう直に京都駅だ、家は直そこだ… それにしても少し疲れたか!!… 横になるか!!…一休みしようか!!… 一休みしよう!!… なんだか眠くなってきた… 一眠りしよう… ”

寺田さんは永い眠りに入り二度と目を覚ますことがなかった。永い眠りに着く時なにを考えていたのだろうか。おそらく達成感と満足感でいっぱいになっていたのではないだろうか!! 奥さんに自慢話をいっぱい話そうと考えていたのではないだろうか!!

寺田さんは仲間の健康を思いやる人であった。特に風邪に掛かった時は、「掛かり始めの対応が一番大切、初期に治さなければいけない、市販の薬でなく、この薬が効くから、これを飲めば翌日には治っている」と自前の薬を分けてくれた。特に私の場合はカトマンズに着いて、日本に帰国する前日夕方体調を崩し、風邪を引き高熱を出して寝込んでしまった。当時は新型インフルエンザ対策で外国からの帰国者は特に厳しく体調を調べられる。高熱を出していると一発に捕まってしまう。自分だけであればよいが、山仲間や搭乗者までも足止めを食っては大変迷惑掛けてしまうので、なんとしても治さなければと心配していた。寺田さんにももらった薬のお陰で翌日は熱も下がり動けるようになった。「熱が直に下がるのは単なる風邪で心配ない」と診断してもらいました。本当にありがとうございます御座いました。しかし今はお礼を言う人がいなくなりました。



自分だけであればよいが、山仲間や搭乗者までも足止めを食っては大変迷惑掛けてしまうので、なんとしても治さなければと心配していた。寺田さんにももらった薬のお陰で翌日は熱も下がり動けるようになった。「熱が直に下がるのは単なる風邪で心配ない」と診断してもらいました。本当にありがとうございます御座いました。しかし今はお礼を言う人がいなくなりました。

## 優しかった寺田さん

宇都宮昭義  
(第三チーム 隊員)

底冷えで知られた1月の京都で弘法大師縁の東寺を振り出しに普化宗明暗寺、観音寺・六波羅蜜時・六角堂・革堂の各観音様、知恩院、そして知恩寺（百万遍）まで徒歩での巡礼に終日付き添っていただいたことがありました。きっかけは小川さんの法事の席で明日は京都の寺巡りをしたいという話を聞いていて「寺巡りすると云っても京都の道は分らんだらうから名古屋駅を出るときに連絡よこせ」と電話番号を教えて頂いた事です。

朝の京都駅まで出迎えに来てくれた寺田さんの姿は寒さ覚悟の遍路旅支度の私とは大違いで、私だったら風邪をひきそうな街着のまま東寺から歩きだしたのです。

各寺で二十分程の尺八献曲、寺田さんは堂外で聴いていてくれて「音が震えていたけれど寒くなかったか」「音が少し元気がないけど大丈夫か」などと、屋外で寒風に晒されて居たのにもかかわらず堂内で勤め終わった私に必ず励ましの声をかけてくれました。

そして途中からは雪がチラつきだしたのに百万遍まで付き添ってくれました。

私は勤めに夢中で寺田さんが寒い事や・忙しい処を来て頂いてる事などには少しも気が付かずに、またそれらを微塵も感じさない寺田さんの優しさにも思い至らずにいました。



トレッキング最後の夜、ヒレでの打上げパーティーで

ました。そして次の冬に牧君のお墓に案内していただいた時も、また娘が京都に越した時も、そして家を建てる時も、いろいろとご好意に甘えてしまいました。

寺田さん本当に申し訳ありませんでした「うつのみやあー寒いだろう、何か暖かいものでも食べようか」といって円山公園の茶店で暖かい蕎麦をご馳走になった時に気が付いて「ここまで来れば一本道で分かりますから」と道案内のお礼を言ってお別れするべきだったのに、思い至らずに、夕日に障子が紅く染まる百万遍で、その美しさに酔いながら阿弥陀経誦経を並んで聞くまで引っ張ってしまい



寺田さんは「出来の悪い後輩と付き合うと言う事は、こんなものだ」と一言軽く言われるかも知れませんが…私にはとても真似出来ない優しい先輩でしたが、SIMACの新人にとって4年部員はいわゆる雲の上の神様でおまけに伊那に居られたので、現役の時はお姿もお言葉も殆んど知りませんでした。

卒業して36年後の秋に、奥又の墓が倒木で壊れそうだ、との情報で集まった時、国立公園では使えない「鋸・鉋」はザックの中に隠し持った私に、「特別に目立てをして来たから、よく切れるぞー」と、とてもザックには入りきらない大鋸を見せてくれたのが寺田さんでした。鳥々からのバスの中や人通りの多い上高地から奥又出合いの道筋で誰一人から咎められる事もなく、あの大鋸を持ち込めたのは、きっと寺田さんの自然の笑顔と、おおらかな雰囲気のある業だったのでしょうか。そしてその良く切れる大鋸をお借りして無事倒木を片付けたのがきっかけで寺田さんと親しくお話させていただくようになりました。

本当にあの大鋸はどうして持ち込めたのでしょうか？ 不思議です。

強化合宿の碓氷峠越えでもアンナトレッキングでもいつもトップを歩いていたのは寺田さんでした。その鍛錬は生半可の事ではなかったと聞きました。

そんな自己には厳しかったのに私には思いっきり温かく優しい先輩だったとしみじみ感じます、甘えているつもりはなかったけれど甘えていたのでしょうか、これからもっと甘えてみたかったと思うと…とても残念です。

## 寺田雅治さん追悼

杉本 敏宏

（第三チーム 隊員）

トレッキングから帰って、パソコンのスイッチを入れ、メールを閲覧していて飛び込んできたのが、松尾隊長からのメールでした。「エッ」と言ったきり、しばらく声が出ませんでした。

「さっき香港で別れてきたばかりじゃあないか」「あんなに元気だったのに、どうして」頭の中でいろんなことがグルグルと回っているだけでした。寺田雅治さんが亡くなったという現実を受け入れるには、多くの時間が必要でした。

私が寺田さんとお付き合いをさせていただいたのは、今回の60周年記念事業のアンナプルナトレッキングに参加することを決めてからです。同じ信州大学学士山岳会にありましたが、私は上田山岳部の所属で、他の学部の人たちとはこれまであ

まりお付き合いがなかったのです。60周年記念事業がなかったら、そしてアンナプルナトレッキングに参加しなかったら、それこそ一生、寺田さんとはお会いすることがなかったかも知れません。その点では、たいへん短いお付き合いでした。

5月末の徳本峠越えが最初の山行だったと思います。7月の富士山では妻もたいへんお世話になりました。



事前合宿、富士山山頂にて

「寺田さんが亡くなったんだ」と話すと、「エーッ、あの寺田さんが、本当に」と、それこそびっくりしておりました。

トレッキングで、お互いに「ハウ」といって、顔を見合わせたことがありました。寺田さんのカメラと私のものが、同じCANON EOS Kiss Digital Xだったので。それでカメラのことなどを話したのを覚えています。

それに「薬」のことでは、それこそたいへんお世話になりました。あの乾燥しきった所で、のどを痛め、途中からずっと風邪気味だったのですが、毎日のように風邪薬をもらいにいったものです。

お付き合いさせていただいた期間は短いものでしたが、この間、本当に親しくさせていただいたと思います。

私は、寺田さんのあの飄々とした風貌が好きでした。

## 寺田さんを偲んで

大安 徹雄

(第三チーム 隊員)

「プシュ！」「プシュ！」

「乾杯！ お疲れさまでした。」

「お疲れさん、うまあー！ やっぱり日本のビールうまいなあー」

10月19日香港から関空へのキャセイ航空CX506便の機内。寺田さんと小生は隣同士で「アサヒスーパードライ」の缶を開けた。それまで、外国のビールばかりだったので寺田さんの言葉に同感だった。

2人共、1ヶ月の旅を振り返るかのように無言でビールを飲み干した。



それから、約10時間後の夜の9時過ぎ、松尾隊長から電話があった。

早いなあ、もう反省会の話かなと出ると「寺田さんが亡くなりました。…」であった。

「えっ…」酔いが醒めた。走馬灯のようにいろんな場面が回想された。

関空に着いて、寺田さんは京都までJRの「はるか」に乗ると言われており、小



9月22日、関西空港出発の三人

生も大阪まで乗ろうと思っていた。荷物の受取りにもたもたして、ゲートを出た時にはもう寺田さんの姿はなかった。その時は別に気にしていなかったが、結局これが寺田さんとの最後だった。

9月22日の往きの関空～香港～カトマンズの飛行機も寺田さんと隣席だった。

いろんな話を聞かせてもらいました。アメリカの娘さん一家とのキャンピングカーでの旅行、故小川さん達とのチベット旅行、

前回のヒマラヤトレッキング、出島さんとの御岳山、現役の時の山行の話等々山、旅に関する話が大半でした。

今回のトレッキングに関する期待感もいっぱいでした。小生も昔の先輩方の話を聞くのは嫌いでないので、殆んど聞き役にまわって満足した気持ちに浸っていました。

寺田さんは先輩、後輩を大事にされる方で、先輩に対する礼、後輩に対する義等今の若者が軽視しがちなことを頑なに実行されていました。

自分も結構そういうことが好きなので共鳴できるところがありました。

寺田さんと初めてお会いしたのは、卒業して関西に戻ってからの何回目かの京都での新年会の時だったと思う。2次会に祇園のしゃれたラウンジに連れて行ってもらい、さすが、社長さんと感心したのを覚えている。その後も関西、松本等での飲み会でご一緒させてもらったが、山行でのご一緒はなかった。山行は今回のネパールのための訓練山行中山道が初めてだったが、常に先頭を歩き、「凄いいおっさん」という感が強かった。

徳本峠の時もそうだった。富士山の時少し体調が悪かったようでしたが、それでもお鉢廻りをして、アメリカの娘さんから預かったという愛犬の遺骨を散骨されていた。

この散骨は続きを今回のトレッキングの最高到達点トロンパスでも実施された。



前夜「高度障害で忘れたらあかんから、散骨したか聞いて。」と言われていたのでトロンパスでしばらくしてから、「ワンちゃんの散骨されました？」と聞いたら「やった。やった。」とうれしそうに話されていました。

帰りの飛行機の中では、ビールを飲んだ後2人とも寝込んでしまい、話込むことはなかった。今から思うと今回のトレッキングの感想、今後の夢など寺田先輩の話聞いておきたかった思いで一杯です。

寺田さん！ ワンちゃんと再会されましたか……。

## 寺田さんを偲んで

池内 寛幸

(第三チーム 隊員)

寺田さんは旅装束をして山の彼方に旅立たれた。

最後の山旅は、アンナプルナー一周トレッキングであり、ピサン下村3,200mあたりからトロンパス5,416mまで続く「スワルガドゥワリ」(天国に続く道)を、そのまま歩いて行かれたのであろう。

寺田さんは、当学士山岳会関西OB会の重鎮である。関西OB会は毎年新年会を開催している。寺田さんとは毎年この新年会でお会いするのが楽しみであった。

寺田さんは私の職業である弁理士についてもよく理解されていた。当会には現在弁理士が4名おり、このうち3名は関西に在住し、新年会にもよく出てくるメンバーである。

寺田さんは、「池内君、あんたは若いときによく勉強して弁理士資格を取ったね。あんたが先鞭をつけたから、小根田君も山内君も続いたんだよ。若い者がいい仕事についているのは嬉しいね。」とよく褒められた。

ときには仕事も頼まれ、実用新案登録出願も担当させていただいたこともある。実用新案登録第3017968号公報は、寺田さんが発明者である。

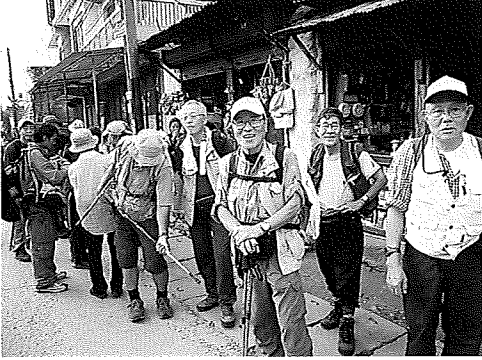
2009年2月の京都で開催された新年会では、アンナプルナー一週トレッキングに行くことを楽しみにしており、散歩して鍛えていること、合宿には全部参加して鍛えると挨拶されていた。

3月下旬の乗鞍合宿では、登りの先陣を切って歩かれ、体力の強さを見せつけられた。夜、岡崎さんの食堂で友人から貰った中国貴州の茅台酒を差し入れたところ、私にはわからなかったが、銘酒であることを説明され、飲み方まで教えていた



だった。

5月下旬のなつかしの徳本峠合宿でも、寺田さんは絶好調で、とくに下りの雪道は強かった。



在りし日の寺田さん。2009年9月24日07:15、ベシサハール、トレッキング初日出発時。

右から小原、奥嶋、寺田、大安、板谷、左端は松尾（敬称略）

7月上旬の富士山合宿では、頂上で吹き飛ばされそうな強風の中、リュックから愛犬の骨粉を取り出して、散骨されていた。バランスを崩して危ないので、私は懸命に寺田さんの身体を支え続けた。

そして本番のアンナプルナー周トレッキングでは、快活で若い者にも負けない元気さもあり、サブリーダーとしての責任も全うした。憧れのアンナプルナー周トレッキングを済ませ、遣り残すことも無くなったのかもしれない。

寺田さんには、私の好きな次の詩を献上

したい。

山の彼方の空遠く、幸い住むと人のいう  
 ああ、われひとととめゆきて、涙さしぐみかえりきぬ  
 山の彼方になお遠く、幸い住むと人のいう  
 （カール・ブッセ作、上田敏訳）

寺田さんに合掌。

## 寺田さんを偲んで

石山 駿  
 （第三チーム 隊員）

私は今も私の掌に感じる  
 香港空港での別れ際、  
 寺田さんの分厚い掌に力強く握られた私の掌に残る寺田さんの掌の温もり  
 そのとき「また お会いしましょう」寺田さんは柔和な笑顔で別れの挨拶を述べられた

「いろいろお世話になりました ありがとうございます」 私は返事させていただきました

小川さんとも寺田さんともしばしの別れを述べあっただけなのに  
いま私はアンナプルナトレッキングの画像を順番に逆送りしています  
出発点の香港空港での再会の握手に思いをはせています  
寺田さん、もう一度ここから仕切り直しましょう  
トロンパスなんてへっちゃらですよ  
カリガンダキ川を颯爽ととばしていったじゃないですか  
ゴラパニへの急登、強かったですね

いま寺田さんの顔が笑顔にゆらいでいます

## 寺田さんを偲んで

坂本 貴男  
(第三チーム 隊員)

寺田さんの悲報を知らされたときは本当に驚きました。トレッキングから帰国したばかりの未だネパールの余韻が冷めやらないうちにメールで連絡を受けましたが、その時はメールの意味を俄かに理解することができませんでした。いまこうやって書いていても、トレッキングでいつもチームの先頭を歩かれていた寺田さんの元気な姿が思い浮かび、今でも寺田さんが亡くなったということが信じられません。

今回のトレッキングでは、信州大学の部外者である私を、信州大学の皆さんの輪の中に入れていただきまして、思い出深い大変楽しいトレッキングができましたこと、寺田さんをはじめ皆さんに深く感謝しております。

寺田さんとは昨年5月の徳本峠の合宿と7月の富士山の合宿、そして今回のアンナプルナのトレッキングでご一緒させていただいたのですが、いつも気さくに声をかけていただき、いろいろなお話を聞かせていただきました。

寺田さんには、今回のトレッキングでは本当にお世話になりました。先輩が新入部員に教えるように、私には親切にいただきました。富士山合宿では、トレッキングのためのトレーニングとしてスクワットをすることを薦められ、スクワット



のやり方も教えてもらいました。私は昨年の春から腰を痛めていて、トレッキングに行く前のトレーニングをどうしようかと不安に思っていたところだったので、富士山から帰って直ぐに始めてトレッキングの出発前まで、寺田さんから教えられたスクワットを続けました。そのおかげで、トレッキングをしていて腰痛も起こらずに快適なトレッキングができました。また、トレッキングで歩き始めた初日には、私の登山靴の靴紐がほどけたのを見て、登山靴の靴紐の結び方を丁寧に教えてもらいました。そして、3,000m近くになってから、少し疲れが出始めて咳や鼻水が出てきたとき、寺田さんは私の症状をお医者のように確認しながら風邪薬を出してくれました。その時に、元気になるようにとビタミン剤も一緒に出していただいて寺田さんの親切な心遣いに恐縮しました。

寺田さんとは短い期間ではありましたが、にこにこやさしく話しかけていただいた寺田さんの明るい笑顔は、ヒマラヤの白く輝やいた峰々と共に、これからも深い思い出として残ることと思います。今思うことは、なぜ寺田さんのような良い人が早く逝ってしまうのかという残念な思いです。

寺田さんのご冥福を心からお祈りします。

## 寺田雅治さんのこと

大沼 淳一

（第三チーム 隊員）

信州大学山岳部OBのみなさんとのお付き合いのきっかけは故小川勝さんです。名古屋の自然環境を守る市民運動の過程で出会った岩津よしえさんのツレアイさんとしての登場でした。仙台一高山岳部で山登りを覚えた私にとって、信州大学山岳部は雲の上のような存在でしたが、小川さんとはすぐに意気投合しました。御山谷の大滑走を経験できた立山の春スキーや乗鞍岳の冬スキーなどに誘っていただき、扇能さんなど信大山岳部OBのみなさんや乗鞍の岡崎さんとの出会いも生まれました。寺田さんともそうした出会いの中で何回かお目にかかっていましたが、それほど深いお話が出来てはいませんでした。

今回のアンナプルナサーキット遠征では、副隊長として、また医薬品やパルスオキシメーターの計測や管理などで活躍なさるお姿を拝見して、凜として誠実なお人柄を尊敬の目で見させていただいていました。また、写真を撮ったりして皆さんの

足並みに遅れることが多かった私は、最後尾を歩かれることが多かった寺田さんと自然に一緒になり、神々しい山々を見ながら世間話を度々させていただきました。この遠征が終わったら京都を案内していただくとの約束もしていただいていた。

寺田さんは小原さんと一緒のテントで、不思議にいつも私のテントと隣り合わせでした。ご高齢でもやんちゃな(?)小原さんと落ち着いた口調で話す寺田さんとの会話が毎晩聞こえてきました。その寺田さんが眉をひそめて自分のパルスオキシメーターのデータがいちばん良くないと嘆いておられたことが印象に残っています。皆さんの下痢や風邪などの様子を心配して薬を出したりしていた寺田さん自身が高所の影響を最も強く受けていたようなのです。高所の弱いことにかけては人後に落ちない私ですから、この悩みはよくわかりましたがどうすることもできませんでした。

それでも無事にトロンパスを越えて元気にムクチナートに下山し、明るい笑顔を何度も見ていましたから、まさか京都駅で倒れられて帰らぬ人になるなど夢にも思いませんでした。本当に残念です。私のようなよそ者にも常にやさしく接していただいた寺田さん、どうもありがとうございました。アンナプルナ山群の白き峰々の風景に包まれて安らかにお眠りください。

## 寺田さんを偲んで あかぬまどるのものの語り

瀧川 正子  
(第三チーム 隊員)

寺田雅治さまのご冥福をお祈り申し上げます。

名古屋の金山駅近くに木曾屋という飲み屋があります。芝居の後に俳優の栗原小巻さん、有馬稲子さんなどが寄るようなお店です。なんと、この木曾屋に「春寂寥」の歌詞が彫られた立派な板があります。信大OBが寄贈されたものだそうです。

…

嵐は山に落ち果てぬ 静けき夜半の雪崩れ  
ホダの火赫くさゆらげば 身を打ち寄する白壁に  
冬を昨日の春の色 あはれゆかし友どちが  
あかぬまどるのものの語り

…これからも、いつまでも、あかぬまどいが続いてほしい。



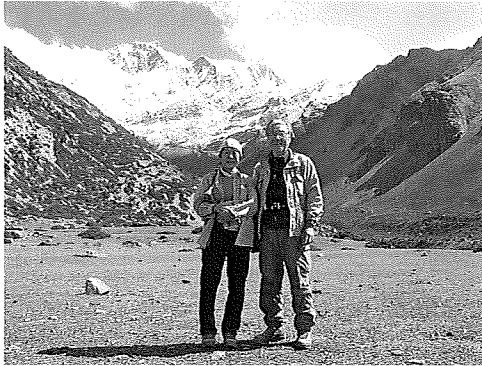
さて、旅の中での寺田さん

- ・第3チームの副隊長でした。
- ・周到な医薬担当者でした。頼りになりましたね。
- ・熟大メイトの取扱いを楽々となさしておられました。
- ・お孫さんが日本語で「チョー（ウ）マー」と言ってその食べっぷりを嬉しそうに語られた。
- ・松尾隊長の孫息子さんの誕生日と寺田さんの誕生日が同じだそうですよ。
- ・お留守宅を気遣うと「僕がいなくて、（家族は）のびのびしていますよ」。
- ・私が軽い短靴で歩こうとした時「イヤイヤ山靴に限るよ」と。
- ・パルスオキシメーターの数値を気にされていた。ピサン下村で寺田さんが数値80程度のように、ピサンB. C4,200mまでは無理はされずでしたね。
- ・トロンパス越えをした後、酒が解禁となり、美しいマルファ村での沈殿の夜、楽しく痛飲されておりましたね。
- ・幾度なく「この旅に小川勝がないのが残念だ」と。
- ・ヒーレまでの長い石段に私が悲鳴をあげると「弱音は吐かない」と緑のバンダナ姿でスタスタと先頭を歩きましたね。

寺田さんをお見送りし、取り残された私は信大、ネパール、チベット、山、音楽療法などの言葉に出会うたびに、まさに連想ゲームのように寺田さんを思い出し、追想する日々です。これらの言葉や事象に思い出が宿っており、それらを大切にしております。もう「まどう」ことは叶いませんが、これからも寺田さんを忘れないよ。次のような話があるからです。メーテルリンクの「青い鳥」にあります。死と命を主題の話であることは周知のことですが、青い鳥を探しにチルチルとミチルが黄泉の国に行きます。二人が黄泉の国に入り、おじいさんとおばあさんを思い出すと、黄泉の国のおじいさんたちは「ああ、眼が覚めたよ、どうも孫たちが私たちを思い出してくれているようだ」と話し合うのです。即ち、思うことが黄泉の国にいる人たちの眠りを覚めます、という組み立てです。

さて、年をとるのもいいもので、まずまずの健康に恵まれ、仕事から解き放たれ、時間を我が手に入れてから、K2・バルトロ氷河、アンナプルナ内院トレッキング等々を構想しておりました。そこに2009年1月25日、名古屋駅のホテルアソシアにての小川勝さんの三回忌があり、寺田さんから「信州大学学士山岳会60周年記念事業で、チーム編成でネパールへ入るよ。僕は、アンナプルナに行くよ。（恵子

さんも行くよ。)」その場で、私は迷惑も考えずに即決しました。事前訓練にも諸般の事情で一度も参加せずの私は、本当に心苦しかったです。岩津さんからも「1ヵ月の長期であり、体力とチームワークが心配でなりません」との話もありました。寺田さんには、何回も電話をしては相談にのってもらいました。その度に「ビスターリ、ビスターリで行きましょう！」



チュルー山群を仰ぐヤクカルカで

また、松尾隊長にも「名古屋の滝川さんについては心配することはない」とまでおしゃってくださったようです。こうして私も仲間入りできました。寺田さん、本当にありがとうございました。勿論、名古屋チームの小原さんや石山さんにも何回も電話をして、今回の旅が実現しました。

## 消えたサングラス

大島いよ子

(第三チーム 隊員)

「オッ、こりゃ、わしのサングラスとおんなじや」

何気なくテーブルに置いた私のサングラスを見て、寺田さんがおっしゃった。そして、ご自分のサングラスをザックの中から取り出して比べられた。並べてみると、同じタイプのサングラスだった。寺田さんはアメリカで購入なされたということだったが、それは“NASAで研究開発された技術により、紫外線99%以上カットの偏光レンズを使用し、眼鏡の上からもかけられる”との謳い文句につられて買い求めたもので、割とレンズが大きいため、近眼の私はとても重宝していた。だが、フレームが真ん中あたりで少し細くなっており、そこから左右両方ともポキンと折れてしまい、今回のトレッキング用に買い換えなきゃと思いつつ、結局応急処置的に黒のビニルテープを巻いて持参していた。

寺田さんと初めてお会いしたのは、本トレッキングの訓練の一環で行った6月の徳本峠越えだった。寺田さんは元気よくトップを歩いておられ、私は列の最後からヒョコヒョコと従っていた。夜、徳本小屋でのランプの明かりのもと、学生時代に奥さんと出会ったことや学生寮での武勇伝を柔らかな京ことばで懐かしそうに話



しておられたのが印象的だった。興が乗って、皆さんが『ボンカラ節』を歌い出したら、「これは女性蔑視の歌のようだが、気にせんといて」と気遣ってくださった。フェミニストだなあと思いつつ、お顔立ちがどことなく亡き父に似ていたのので、親近感を覚えていた。そのせいもあってか、お気に入りのサングラスが寺田さんと同じということで、私は何だか嬉しかった。

ところが、そのサングラスをトレッキングの初日に、しかも歩き始めてすぐに落としてしまった。誰か拾ってくれなかったかと後からくる人たちに聞いてみたが、残念ながら誰も気づかなかったようだ。トレッキングはまだ始まったばかりで、亜熱帯の日差しは真夏並み。仕方なく、次の休憩地で代替りのサングラスを買い求めた。

サングラスを落としてしまったと悔しがる私に、寺田さんは「自慢してやろうっと」とそのサングラスを目の前でほらほらというように茶目っ気たっぷりに振り回していた。

——トレッキング中の寺田さんのサングラス姿の写真を見るたびに、そのことを思い出す。

トロンパスの丘で小川氏の慰霊をした際、哀切漂う「春寂寥」を聴きながら、私は胸の奥から突き上げてくるある種の衝撃のような不思議な感情に襲われた。一面識もなかったその人の死を悼むということもあったであろう、また標高5,000mもの雪のトロンパスを越えた喜び、その感激もあったであろう。しかし、何か言葉ではうまく表現できないのだが、それは一種のうねりのようなもので、嗚咽とも慟哭ともとれるようなものに形を変え、体中を渦巻いた。そのとき私はそういう感情がどこからくるのか、どういう意味をもつのか、大いに戸惑い、そのこたえを見つけきれないままトレッキングを続けていた。

帰国後、寺田さんの訃報を聞いたとき、トロンパスの丘で味わったあの名状し難い感情がドッと押し寄せた。何とも理不尽な！ 何とも不条理な！ そんな言葉が衝いて出た。それは、生きているものが内包している哀しみだったのか。生きているからこそ味わわねばならない感情だったのか。私はその感情の渦に巻き込まれ、しばらくそこから抜け出せなかった。

ひと月後、その同じサングラスを求めて前回購入した店へ赴いた。ところが、当然あると思ったそのサングラスは、影も形もなかった。もう扱ってないという。……そのとき目の前から寺田さんがスーッと消えた。



いまもそのサングラスを探し回っている。同じサングラスが手に入れば、寺田さんに会えるような気がして。「わしのとおんなじや」——そんな声が聞こえる……。

## 逝ってしまった寺田さんへ

大沼 章子  
(第三チーム 隊員)

寺田さんをご一緒させていただいたのは、今回のトレッキングの準備会合を含めたほんの数回です。トレッキング本番が初めてのお付き合いと言えるでしょう。そんな私ですから、寺田さんの多くを語ることは出来ませんが、ネパールの山を2週間ほどご一緒させていただいて、感じたことを綴らせて頂きます。

寺田さんは、好感の持てる凛とした方という印象です。

まずは、ベシサハールの夕方。私のスケッチは全くもって下手極まりないので、ここ10年ほど、レンズを通したものでは物足りない視覚的な印象をスケッチブックに留めています。ベシサハールのテント場後方の山を画いていた時、寺田さんから「見せてもらっても良いですか」と声をかけられました。「いえいえ、とてもお見せできるものでは、…」という、にっこり笑ってさっと離れていかれました。一言で言えば、感じよかったです。

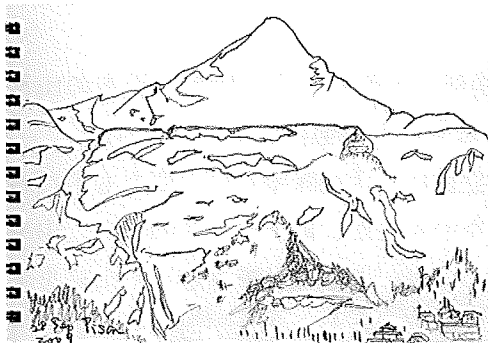
山を歩きながら、私と連れ合いは歌が好きでよく歌います。歌う時は横隔膜まで息を吸い込みむので、酸素の補充にも良いという効用があります。他の方には騒音以外の何者でもなかったかもしれませんが、少なくとも、寺田さんは受け入れてくださって、“穂高よさらば” だったのでしょうか、(3,000mを超えないV字谷を歩いている頃)一緒に歌ってくださったことが、寺田さんの声質の良さと共に印象に残っています。

そして、3,000mを超えた頃からだったでしょうか、寺田さんは自主申告して隊列の後尾を歩かれ、出来るだけゆっくり歩くようにされていました。そんな頃でも、毎朝の日課のパルスオキシジェンメーターの測定に関しては、いつも助っ人役を務められました。私の数値が少し低めに出ると、「あなたはこんな数値ではいけない、もう一回測りましょう」と細かい気配りもありました。私には不整脈があつて正常な測定が出来ず、寺田さんには手間を取らせてしまいました。

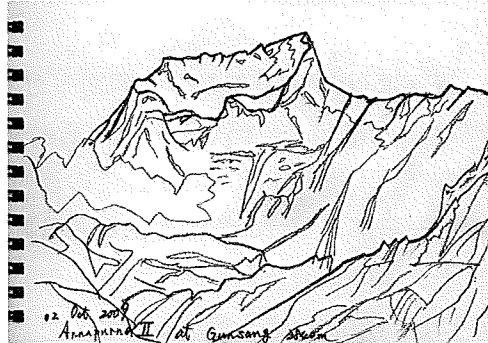
これ等がまるで昨日の事のように目に浮かびます。その寺田さんが逝ってしまっ



たと言われても、とても納得できません。私には、“穂高よさらば”と共に忘れられない存在です。



Mt. Pisan at Lower Pisan Village



Mt. Annapurna II at Gunsang

## 「モクさん」を偲ぶ

西郡 光昭

(第四チーム 隊員)

モクさんが亡くなった09年10月19日、彼も入れて信大隊の9名はカトマンズから香港乗り換え関西空港まで同じ便の客だった。

アンナプルナー一周トレッキング2週間のモクさんはもちろんだが、わずかな日数の他のメンバーも共に、空港を出るときは「ご苦労さんでした、また報告会で会いましょう」と、労いの言葉を交わしてお別れしようと思っていたが、ふと、気がつくともクさんの姿が見えないではないか。あの義理堅いモクさんが何か変だなあ…。伊丹空港経由で仙台の自宅に帰り着くまで気になって仕方なかった。夜9時半ごろ、アンナトレッキングのリーダーで、今回の信大プロジェクト実行委員長の松尾君から君の急死の知らせを貰ったときの驚きと叫びはなかった。そして、どうして、一体何があったんだ？ の疑問が頭を駆けめぐるのは当然だ。今にしてそれを探ろうとしたとてせんなきことだが。

想えば、今回のネパール計画、特にアンナー一周プランに対するモクさんの熱の入れようは尋常ではなかった。12人パーティの医療担当として、医薬品の確保やその使い方まで一所懸命の努力。そのかわら、トレッキングに耐え、その文字どおりの山場となる5,300mの峠越えに備えて体力の確保と高度への順応のために富士山をはじめ多くの山行にも余念がなかった。それらトレーニング山行報告のメール

には殆んど「寺田さん」の名前が載っていて、モクさん頑張ってるなあーと感心したことだった。それを知る多くの人達は、あの元気なモクさんが、奥さんと顔を合わせる直前に急逝することなど、とても考えることができなかつたはずだ。

☆ ☆ ☆

我々は信大1960年入学の同期生だが、山岳部に入部したのは伊那と松本の山岳部で10人ほど（長野や上田の同期生を入れればもっと多勢になるが）だった。

モクさんもそうだったが、この連中の山行意欲は、手前味噌だが大変なものだった。一年部員だけの雪山や岩登りは許可されなかつたが、前アルプスの縦走、中央アルプスの全山を走り回ったりした。さて次の山は、となるとモクさんや出島を中心に、口角酒の泡を飛ばしてケンケン誘々やるのだったが、それが何とも楽しくってしようがなかつた。

合併して伊那・松本山岳部として活動することになってからは、伊那と松本に別れている部員の交流はそれまで以上に交流を盛んにしなけりならなくなつた。



35年度春山 坂巻温泉の前で

多い年には、月に最低2回は交互に、といつても私のほうが仲間の多い伊那へ出向くことになるのだが、「リーダー会」を開くほどだった。それが終わればいつも飲み会だったが、そこでまた山の議論を始める、そしてモクさんはそういう時でも決まって議論の中心だった。それほど、彼は好ましい理屈屋さんでもあり、それなりのプライドの持ち主でもあつた。だから、そういう話しのまともな相手となるとせいぜい先年病死した小谷君ぐらいで、私や出島君などは、楽しく飲めあ良いじゃないの?!という態度だったことを懐かしく想い返す。

その当時、信大学生の恵子夫人と既に親しかつたモクさんは、続く合宿やリーダー会に時間をとられ、彼女とのデートを何度も邪魔されたに違いない。せめてのことに、二人の結婚祝賀会を木曾駒ヶ岳にある農学部の演習林ヒュッテで開いたことで許しを得たことにしたいと思つたことである。

☆ ☆ ☆

その後、当方や出島は留年で卒業が遅れることになるのだが、熱心に山岳部の運営に実績を残しながらも、モクさんは4年でさっさと卒業してしまつた。その点では彼は付き合いが悪かつた。



卒後モクさんとは、5年に一度ほどは会う機会があったか、残念ながらすっかり疎遠になってしまった。林業や土木関係の仕事をしていると仄聞はしていたのだが…。そして、暫らく振りで元気な彼と会ったのは95年4月、ネパール・ランタン谷トレッキング2週間の旅で、だった。彼は恵子夫人と私は娘と一緒に参加した。

このトレッキングは今回の60周年記念事業と大いに関係がある。長くなるので詳細は割愛するが、この企画は2007年冬急逝した小川勝が企画したものであったことだけを強調しておこう。

それは何とも楽しい旅であった。期間中は連日好天に恵まれたが、モンスーン前とはいえ、こんな気持ちの良いことはそうはなかろう。それに参加者がまた多士済々、楽しい人達ばかりだった。そのメンバーを記したいが紙幅の都合で省略するのが残念だ。

モクさんと奥方の参加は、仕事やお子さんのことで心配がなくなったからだろう。恵子夫人も学生の頃から山はよく知っていたのだから、この機会を待っていたのだろう、と思われた。私の娘はトレッキング中、恵子夫人に何かとお世話になって良い思い出ができたし、寺田のおじさんも声を掛けてくれて良い人だったのに、と急逝を惜しんだ。

☆ ☆ ☆

トレッキングの話は15年ほど前になるのだが、モクさんが再び山に向けて動き出したのはこのトレッキングがきっかけになったのではないかと勝手な想いを巡らしている。

近ごろ、山岳会OB連中が雪解けを待って、鳥々谷から徳本峠を越えて上高地に至る馴染みのコースを辿る企画に参加した、と聞く。

一方、地元に近い六甲山塊へも関西にいるOB達と出かけた、とも聞けば、山登りのためにもっと減量を、と努力したのだ、とも聞いた。なかなか活発なモクさんの活動振りだと感心していた。

そして今回の信大創立60周年記念事業への参加だった。会う度に若い頃のような引き締まった顔と眼の光を強く感じた（ような気がしていた）。

そう感じていたのに何と残念なことかと胸が詰まる。次ぎはもっと別の高いところへ、恵子さんと二人で或いは子ども達を誘って行こうと考えながらの帰途だったかも知れない。

しかしなあ、モクさん。オレのように、もう、上高地バス停から小梨平の信大キャンプまで歩くのも覚束なくなったような人間にとっては、君は頑張ったなあ、と思うよ！

何もできなくて、山からでなく、酒飲みながら本から借りた雑学でごまかすなんてのは惨めだ。モクさん、そうならなくて良かった、立派なもんだ、と考えて貰おう、そうすれば恵子さんにも、子どもさん、孫さんにも早すぎる別れを許して貰えるのではないだろうか。

モクさん、あばよ！

## 寺田先輩を偲んで

小林 元紀

(第二チーム 隊長)

私は工学部卒で、しかも大学4年間ずっと善光寺平で生活していました。したがって、山岳部の仲間でも工学部、教育学部卒の人には顔見知りも多くいますが、農学部、文理、繊維は言うに及ばず医学部にいた人たちは私にとって遠い存在でありました。

関西地区の山岳部OBの新年会が何時ごろから開催されていたかはわかりませんが、10数年前から声をかけていただき、私にとっての楽しみな年中行事の一つになっています。

寺田先輩との顔合わせはこの席上でありました。会は年の功で寺田さんの開会の挨拶で始まります。旧知同士の楽しいお酒がすすむなかで、寺田さんとは親しく話すこともなく酔いつぶれるパターンでした。そうした中でも、寺田さんはいつも私に声をかけてくれ、今住んでいる所、卒年、学部など聞くことは大体同じことでしたが、そんな話のなかでの口ぶりや絶やさぬ穏やかな笑顔などからこの人は氏育ちがよく、自分とは住む世界が違う人だなあと感じ入った次第でした。

今回のネパール山行で第2チームに参加した私がピサンピーク登頂してBCに戻ったとき第3チームの人たちが高度順応の一環でピサンBCに足を伸ばしたのと奇しくも合流できました。その中にいるはずの寺田さんの姿がありませんでした。ピサンの村までのトレッキングでだいぶ疲れて下で休んでいるとのことでした。たしかにこのBCまでは下の村から1,000m以上の高度差があるので高度順応にはグッドかもしれませんが疲れた体には一寸つらいものがあります。

翌日の夕食はピサンの村で第3チームが合同の夕食会を開催していただきました。寺田さんの横に席をとっていただき親しく話が弾みました。登頂を祝ってくれて、BCまで行けなかったことを詫びて、来年2月の恒例となった京都の新年会で



会うことを確かめ合って…。

その後、我々はチュルー登攀に向かい、戻って第一チームBCを訪ねバックキャラバンに入りました。第3チームがトロンパスを越えアンナプルナー一周を無事終えて、ポカラにむかい追悼式に参加して日本に戻ったことを国内情報担当の松寄氏からの日々の連絡で知っていました。

その連絡の中で、寺田先輩の急死の報を聞いたときは耳を疑いました。年を取るにつれ身近な人の死に遭遇する機会は多くなってきましたが、ついこの前まで元気な話をし、年明けの再会を約束していたのに…、少なくとも山に行く者はそれなりに健康であるはずだが…

いろんなことがあの穏やかな笑顔とともに頭の中を駆け巡りました。

10月21日バックキャラバンの最終日、10時過ぎ日本時間14時ごろでしょうか足を止め、北東の方向を確認しました。マナスル連山の西の端の山が白く光っていました。

そちらに向かってみんなで遥拝しました。合掌！

## 寺田さーん

駒井 浩  
(第二チーム 隊員)

寺田さーん！ 寺田さーん！！ どこ行っちゃったんですかー？

登り残した錫杖岳に行く予定だったじゃないですかー！

芦生につれてってくれる約束だったでしょう！

北鎌尾根にも行こうって言ってたじゃないですか！

私が信大山岳会に入会して最初の新人合宿のリーダーが寺田さんだった。

長野へ移るまでの1年間、秋の八ヶ岳～美ヶ原縦走合宿のときも、冬山合宿もリーダーは寺田さんだった。

私にとっては大きな存在だった。

学士山岳会関西支部会でいつも一緒に飲みつぶれたものだった。

また、懐かしの徳本峠会には、案内を出すといの一番に返事を下さっていた。



37年度秋山合宿、八ヶ岳～美ヶ原縦走途中で

毎回、トップで徳本峠小屋まで登っていたのに……。

ネパールで、カトマンズまであと2日というところ、シャンゲの村はずれのバティーで訃報を聞いた。

最初は何がなんだかわからなかった。次にめっちゃめっちゃな悲しさが襲ってきた。

外へ出てみると、10月だというのに、すぐ上の山肌を蛍が飛び交っていた。

## 寺田さんを偲ぶ

神野 国昭

(第二チーム 隊員)

昭和37年の山岳部新人合宿は徳本峠を越えて上高地へ、50数名の入山です。

その時の2年先輩に寺田さんがおられました。2年先輩と言えば神様のような存在です。

その神様がテントの中で「私はスイカでもブドウでもそのまま食べて種だけはき出すことが出来るんだ。」と言っていたのが非常に印象に残っています。

その後の出会いは駒井君らと「楽六甲(ラクロッコウ)」と言う山の会をつくり徳本峠越えをし、翌年ふくふく亭(芦屋の活とらふぐ店)で、松尾さん、駒井君、中村君、故小川君、等で信州大学山岳OBによびかけて徳本峠越(第1回)が実現しました。

その折に松尾さんが楽六甲のためにヒョウタン池を案内してくれることになりその時のトップに寺田さんがなってくれました。その健脚ぶりはすごいものでした。

さすがに先輩はすごいと舌をまきました。

そして2009年信州大学60周年記念事業で第2隊と第3隊が9月30日に合同食事が有り、寺田さんが「神野君ピサンピークではがんばったね、今年もふくふく亭でてっちりが食べたいね。」と言ってくれました。その日は第3隊はトロンパス越えへ、第2隊はチュルへ。何と言うことでしょうか。10月21日サンジェにて昨日寺田さんが亡くなったと聞かされて気がめいりました。夕食をすませ表に出てぼんやり



と向かい側の山裾をみていると蛍が淡い光を放ちながら飛んでいました。何とも寂しいかぎりでした。

寺田氏の御冥福をお祈りいたします。

## リーダーシップ

米倉 幸夫

（第四チーム 隊員）

小川さんの追悼式にだけにといいわがままな参加の仕方を許してくださいました皆様に感謝申し上げます。

第3隊の隊員みんな引き締まった体と精悍な容貌でほぼ予定通りにポカラのホテルに到着したのをみて本当に良い瞬間を出会えたなとおもいました。あの日あんなに突き抜けた笑顔を見せていた寺田さんがよもや帰国してご自宅目前で急逝されるなど思いも寄らないことでした。

追悼式に勝手に持ち込んだお供えの星めぐりの歌の絵本の歌詞に合わせて口ずさんでくださった方もいらっしゃいましてとてもうれしく思いました。



団体行動が苦手という性癖はいくつになっても変わりません。ましてそんな輩すら取りまとめて大仕事をやってのけたリーダーシップは、まさに故小川さんに共通するものなのだと思います。私の人生の幸せな部分の大半は信州での山と人との出会いから繋がっているのだと感謝しております。皆さんでハイキングに行ったポカラの

日本寺を上を続く尾根から見下ろした写真を沿えさせて頂きます。

合掌



## 高知が縁で

板東 昭  
(第四チーム 隊員)

寺田さんと初めてお会いしたというか同席したのは、一昨年秋に乗鞍で行われた小川勝さんの偲ぶ会でした。

二度目は、今回のアンナプルナトレッキング隊一行がポカラに下りて来たときでしたが、それから帰国迄で当然ですが殆んど会話することはありませんでした。

ところが、ネパールからの帰国当日、夕刻の出発時間迄、荷物置き場にホテルのルームが五部屋位あてがわれました。その時に同室になったのか出かけずにいて偶々お会いしたのか記憶は定かではないです。それにどういふきっかけで話をしたのかも覚えていませんが、私が高知の出身であることがわかると土佐弁で話しかけられました。

寺田さん「昔、住友林業時代、ゴルフ場造成の仕事で土佐清水に何ヶ月間いたときに、ほんで、こじゃんと飲んだき。工事が順調に進めば順調だということで一杯やり、天気が悪い時は仕事ができんきとって飲んだなあ、魚は新鮮で美味しいし、酒も美味かった。いやああの時の高知はまっこと良かったきに。そうそう、山下君が島で先生していたなあ」と、懐かしそうに話されました。

その後、私が当時の山岳部や思誠寮のこと等を尋ねると、出島五郎さんとコンビであったことや、南寮の一階が20号を始めとして山岳部の溜場だったこと等を話してくれました。

この一件から寺田さんとの距離が一気に身近になりました。

香港の空港で、寺田さんが「私は、京都なのでここでお別れします。」これが最後の声とお姿になりました。

帰国後、井関さんからの寺田さん急逝のメールは驚きの一言でした。

あらためて、ご冥福をお祈りします。



## 山を愛するジェントルマン寺田さんとの最後の一週間

長谷川和男

（第四チーム 隊員）

山岳会とは無縁の僕ですが、かねてからネパールを訪れてみたいと考えていました。

今回の信大山岳会主催のツアーは、学生時代から親しくしていた小川勝さんや同期の関根君の追悼も兼ねた企画だと聞き、良い機会だと思い参加させていただきました。

学生時代に夏の北アルプスを幾峰か登った経験しかない僕ですが、折角行くのであればヒマラヤの山々を間近に見たいと思い第3チームのアンナプルナトレッキング隊に参加希望しました。松尾さんに相談したところ「無謀だ！ 無理だろう」と一言のもとにあっさり却下され断念。やむなく第4チームで参加することになりました。その代わりといってはなんですが、皆さんと8日間一緒に行動を共にした後、ツアーから離脱。その後1週間単独でカトマンズ盆地周辺の集落を訪ね写真を撮る行程を組みました。

小川さんと関根君の追悼式は地元協力者も交え、厳かな雰囲気の中で執り行われました。参加者全員によるガンジス川源流への小川さんの遺骨散骨は心に残るセレモニーでした。初めてみるヒマラヤの山々はさすがにスケールが大きく圧倒的でした。カトマンズ市内および周辺の世界遺産も見応えがありました。またインド国境近くのタル族の原始的な集落やカトマンズ盆地各地のネワール族やタマング族をはじめとした集落での素朴な生活と田園風景は興味深いものがありました。

しかし今回の旅で一番の思い出は先輩「寺田さん」のことになります。

寺田さんは山岳会ベテランOBで第3チームの一員でした。僕は第4チームですからもともとの部屋割りでは別室だったのですがひょんなことから同室になりました。ひょんなこととは「いびき」です。お互いの同室相手が鼾かきの持ち主だったのです。僕の当初の同室者Y氏は会うなり僕に耳栓を手渡し「私はすごい鼾をかきます。ご迷惑をおかけします。ついてはこの耳栓をしたうえで寝てください」と一言。僕は「まいったなあ」と思いましたが、耳栓まで持参されているのだから

ら「まあ1週間だ。我慢するか」と内心苦笑するしかありませんでした。ところが寺田さんと第3チームで同室であったO氏も名うての軒かきとのことで、かつY氏と知り合いだったのです。そこで同病相哀れむではありませんが、Y&Oのお二人が配慮して同じ部屋に入ることになり急遽部屋替えすることになったのです。第3チームと第4チームがポカラのホテルで合流した時の事です。

3週間にわたるトレッキングの疲れも感じさせず、寺田さんは大きな荷物を担いで部屋にやってこられました。初対面の先輩でした。寺田さんは「寺田です。よろしくお願ひします」と丁寧な挨拶される。窓際のベッドをお使ひくださいとお薦めすると、「いえ々私は廊下側で結構です」と謙虚に辞退される。後輩の僕は恐縮してしまいます。そこで持参していたウイスキーを挨拶代わりにお薦めし、卒業年度、学部等簡単な自己紹介をお互いにしました。「寺田さんとの一週間」はこうして始まりました。

翌日の夜は第3チームのトレッキングの様子や寺田さんの学生時代からの山遍歴の話をついたと記憶しています。そして3日目の夜だったでしょうか、ホテルの部屋で地酒を呑みながら取留めのない四方山話をしていると、寺田さんから「長谷川さんはひょっとしたら関西出身ですか?」と尋ねられました。「京都出身です」と答えると「やっぱりそうですか! 私も京都なんですよ」。僕は日頃一応標準語らしき言葉を使っているのに、関西それも京都出身と指摘されることはめったにありません。寺田さんも関西弁的なイントネーションがほとんど無かったため気がつきませんでした。ですからこの指摘にはちょっと驚きました。続いてお互いの実家の住所を確認すると、共に市内中心街で歩いて行ける程の距離しか離れていないことがわかりました。これを機に京都での共通の話題や情報が一気に始め話が弾み出しました。二人とも酒をこよなく愛するというのもわかり意気投合(!?)です。私的な事も話題に上り始めます。

今回の長期トレッキングに参加するために、医者である弟さんに精密な健康診断を受けた上で奥方やご家族の了承を取った苦勞話(!?)や、相当前から毎日散歩を欠かさず富士登山などで訓練をし、万全の準備をしてきたこと。山を愛する心。卒業後の研究所員や会社員時代の仕事。40歳で独立して事業を起こした時の苦勞や順調に事業展開し海外にまで出かけていった頃の話。一転してバブル崩壊後の苦しい体験。事業をいい形で纏めたうえで息子さんに無事バトンタッチできた事の安堵感。京都での実業人・文化人、お茶人等趣味人たちとの豊かな人間関係。これからは悠々自適で心から自然を、山を、生活を楽しみたいこと等等寺田さんの話は



多岐にわたりました。僕も京都のことや会社員時代の話、ライフワークの一つである「古民家」について話し、興味を持って聞いていただきました。毎晩、時には昼酒をやりながら話が弾みました。お互いに話は尽きませんでした。

そしてツアー最終前夜、寺田さんが「長谷川さんは奥が深いですね！」とひと言しみじみおっしゃったことを印象深く覚えています。しかし、寺田さんこそさらに奥が深く、広い人だったと思います。

寺田さんはちょっとハスキーな声で、何時も丁寧な言葉使いで静かに語りかける人でした。

先輩風を吹かせることは皆無でした。僕だけの偏見かもしれませんが、山男というバンカラで無骨な雰囲気との先入観を持っていたのですが、寺田さんは話題豊富なおうえに実に謙虚で温厚なジェントルマン、ナイスガイでした。得難い先輩友人を得た思いでした。

こんな1週間が瞬く間に過ぎ2009年10月18日夕刻。我々は、今後も時々京都で再会して一献やろうと約束の固い握手をし、カトマンズで別れました。僕は、現在は横浜に住んでいるのですが、寺田さんとの約束で京都に行く楽しみが増えたと喜んでいました。

しかし、1週間遅れで帰国した数日後、松尾さんからの1通のメールでこの楽しみが永遠に不可能になったことを知ったのです。そこには寺田さん急死の知らせがありました。驚きました。日本に無事帰国されたにもかかわらず、自宅帰着直前に急死されたとは！。俄かには信じられませんでした。ショックでした。

2009年12月中旬、ネパールで一諸に呑んだウイスキーを持参して京都のご自宅を訪問し焼香させていただきました。そして、同室者として過ごした最後の1週間の寺田さんご様子を奥様とご息女にお伝えしてきました。寺田さんとは山が縁で結婚し共に山を楽しんでこられた信大農学部ワンゲル部OGの奥様は、「大好きな山を山の友人と一緒に心から満喫し堪能してきたのだから本人は本望だったでしょう。それがなによりのことだと思います」とおっしゃり、寺田さんが息子さんに良い形で事業を継承出来た事を喜んでおられたこととお話すると大きくうなずきながら「そうですか。そう言っていましたか」と自分を納得させるかのように何度も何度も繰り返されていました。

## 沢山の偶然

佐藤 ニナ  
(第四チーム 隊員)

私は第四チームの佐藤ニナです。

今から6年前の秋、私はチベットの旅計画して、小川勝さんの呼びかけで信州大学山岳会の寺田さん夫婦と今関さん（第四チーム）と知り合うことができて、いまでも幸せと思っています。寺田さん夫婦とはチベット旅行以降もお会いすることがありました。

今回の「小川勝君追悼トレッキング」では偶然に食事を一緒にすることが何回もあっても、お互いにあまり話をしませんでした。今回の旅行中の寺田さんはあまりよくしゃべる方ではありませんでした。でも、ネパールを離れる前の二日間では沢山の話をする機会がありました。それも普通の話で、また旅に行きましようとか、来年は台湾の玉山に登りましようとか、飲みすぎた感じで道をフラフラ歩く最後の夜もお話しました。帰りでは、寺田さんは私と同じ関空はずなのに、なぜか一人で出国手続きをして単独行動をしていました。関西空港の税関申告の列を並ぶ前に挨拶をするために待っていただき、このときにどうして一人で出国手続きをしたのかを聞くと、だれかと揉め事があって、“これからは一人で行動する”というのが最後のお別れのお話でした。

私は外国人で日本の税関通過時間は日本人より掛かります。私は手続終わってエスカレータを降りるとき、寺田さんの姿が私に向けて見えて、寺田さんはわざわざ私を待って、これから京都に電車で帰り、その一場面はいまでも印象強く残っています。それは最後の寺田さんの姿でした。

2回の海外での長い旅を一緒にでき、一人の友人として幸せだと思っています。一つの縁でした。年を取ると皆、自己宣伝ばかりの話が多い中で、言葉少なく品のある方は、私の寺田さんの印象です。寺田さんの奥さん恵子さんに言いたいことは、寺田さんがネパール旅行の最後のパーティーでガイドさんと一緒になって歌って、踊っていた姿を見て“寺田さんの人生は幸せでした”。



## モクさんの追憶

出島 五郎  
(学士山岳会会員)

心重くも、思い出すまま君と語ろう。昭和35年4月12日思誠寮入寮。13日入学式。

モクさんとの出会いは思誠寮へ入って2~3日後のことだった。農学部新生の召集があって、優等生が4人あまり肩をそびやかし、「今期、農学生の英語お粗末につき、教養外国語は英語1教科のみと教務より通達があった。諸君、どう対処するか？」と糾弾している。

するとすかさず1番後ろから、「君たちは何の権限があって、そこに立っているんだ。仏語、独語、共に頑張るのが当たり前だ。云々。」「オー！」感嘆。どよめき。モクさんを知った最初である。

新寮生同志いつの間にか群れ集い、鈴木充ちゃん（林）、大野モンちゃん（農）、新君（林）、中沢君（農）達と毎晩人生を語り合い、シケモクをうまそうに喫う寺田君はモクさんということにあいなった。

飯ダイコと二分の麦飯にも慣れた頃には寮伝統文化教授、藤巻光夫先輩たちからの薫陶よろしきを得て、校歌吟詠に感涙し、真夜中真っ裸に下駄でデカンショ踊りのストームに舞い上がった。

感性豊かなモクさんは、何につけても先頭で、藤巻先輩の秘蔵っ子優等生で、そのせいもあり、大イベント寮祭の第2期寮委員会文化委員にモクさんと一緒に小生も指名されてしまった。

アルプスの峰々が白く輝き、日1日深みを増す空のもと、仮装行列から始まった記念祭は、フォークダンス、レコードコンサート、講演会、寮劇、合唱、マラソン、ファイヤーストームなどと、藤巻・寺田ラインで、若人の熱気は盛大に松本の空に燃焼していったのが、懐かしい。

京都、紫野高校で地質クラブのボスで頑張っていたモクさんは、比良山はじめ京都北山をずいぶん分け入ったようだった。樹木・山野草・岩石・気象・天体・登山の知識他博学だった。

特筆すべきは天気図の作成と読み取りだった。その卓越したレベルは見事に山岳部に浸透し、その後合宿では、ラジオと用紙は必需品であり、日に3度の気象通報の作図は、実働、寝る、食う以上に大事な時間になった。石垣島、北北西の風、風力2、気温……モクさんの顔と一緒に今も頭にこびりついています。

モクさんは山岳部には装備が不備だと憂慮していたが、伝説に生きる雲上の大先輩、小林喜芳様（文29入）が手厚く道具を貸してくれるということで、6月の奥又白合宿から入部、眼前にそびえ立つ前穂東面に胸ふるえ、体ふるえてリーダー山田和彦先輩方に必死について行ったものでした。

これより岳のとりことなり、同じ釜の飯仲間となった。

寮食堂の百瀬のおっちゃん（松本高校より炊事担当、この年度で勇退）の大おにぎり2個入り弁当持参で日通のセメント運び（貨車から建材店への小運搬、1日350円？）、野球場でのジュース・パン等の移動販売ボッカ、家庭教師（モクさん）と必死にかせいで、仲良く知恵を出し合い、文林製作所の優しいハゲオヤジに注文してリュックサックを作ったり、憧れの高橋の靴を注文したり、共に少しずつ部員らしくなっていくと同時に、モクさんは生来の一途さと自然に対する真摯なまでのひたむきさで、新人仲間のなくてはならないリーダー的存在になっていったのでした。

夏山縦走合宿（白馬～西穂）と奥又白岩登り合宿の合間の1週間、伊藤国啓先輩（文33入）を親分に、モクさんと3人水入らずの上高地サマーテントのキーパーを務めた。

前もって小林キーボーさん先頭で本部ジープで資材運搬し、サマ天設営、営林署との薪用枯れ木の確認、アルプス観光との折衝と、諸々の用意の末席に加えてもらったことがあった。

とても楽しい夢の如き別天地での務めだった。おかげで日に2回の食糧再生あさりの要領もわかり、その大切な仕事に、お客様の女子大生から「あの人乞食見たい」と言われ、お互い「お前のこと言っとるぞ」と言い、笑ったこともあった。

薪割り、飯炊き、テント掃除の合間に関東の女子は無口だとか、関西のあの子はうるさいが美しい！とか、批評し合っていたら、国啓さんに「観賞用女性にうつつをぬかすな！」の一言に、さすがは越後のフクスマ県より出身の古武士、然とした先輩の世界と、お互いつくづく納得したものであった。

何といっても圧巻は、小梨平一番のファイヤーストームだった。国啓さんの一



声、「寺田、今日も頑張れ！」とて、3日に1回の予定が毎晩敢行。カラマツの梢へ消えて行く火の粉を仰ぎ見て声を限りに歌ったあの時。

さわやかな空気、焚火の熱気、思い込み沸点の歌詩。どの娘どの君も顔を真っ赤にして次から次に繰り出すモクさんの歌にその一瞬を惜しんで歌ったものだった。山の娘口ザリア、あざみの歌、アルプス一万尺、雪山讃歌、人を恋うる歌、原爆ゆるすまじ、山の大神、あの歌この歌、もうキリのないモクさんの世界だった。

寮の先輩たちの薫陶を得てモクさんと何かとよく飲んだ。2人でそっと石松のおばちゃんののれんをくぐると何と！ キーボー様、前山様、イートン様がドンと座っておられてジロリと睨まれ、おずおず片隅でしおらしく焼酎を飲んだことも懐かしい。いつの間にか石松の常連になり、酔ってそぞろ歩けば、薄川の土手、寮歌高唱の消えゆく天空はいつも大星座が広がっていた。

ここでもモクさんは星座の先生だった。松本平も冷気をため、河原に枯ススキが揺れる頃、南東の空にはっきりと輝く「冬の大三角」、あれがシリウス、こっちがプロキオン、おしてオリオンのペテルギウスと教わったあの時！ いつも曇天の北陸でたまに垣間見る大三角、モクさんのにっこり顔が重なってならない。

そろそろ梅雨の明ける頃、静まり返った深夜、池田君（文35年）、モクさんと3人、1升ビンをかかえて松本城の芝生に車座、酔うほどに、お濠の主、白鳥を捕まえようとてドブン、ギャーギャー騒がれ断念。月見櫓の石垣をタッチして、やっとの思いで上がったのもモクさんのロマンの発露だった。帰りに松本警察署の銘板を預かり、寮の玄関に掲げたのもその時だったか？

紫野高校時代より戦後民主主義の日本国を憂え、岸内閣の売国的国家権力に反発激しかったモクさんは日米安保条約改定を前に6月15日、思誠寮の闘士たち、鈴木充君（林35）、川崎誠君（林35）、大野晃君（農35）、その他大勢とヤッケに登山靴で身を固め、松本駅プラットホームで戦後15年、アメリカの属国になり下がって二度と国を戦争に巻き込ませてはいけない！ のシュプレヒコールのもと、国会議事堂前に向かった。

結果は歴史が語るごとく辛い形になったが、鬼の第4機動隊とわたり合い、怪我した鈴木君を助け、さらに拘束されるも無事2階から脱出。武勇伝は全く大活劇を見る思いで圧倒される。



寮の最後は山岳部の春山合宿だが、返す返すも残念な悲しい結果になってしまった。4月13日その日、遭難対策本部設置、槍サポートのモクさんは小林リーダーの指名で、松本で会計・連絡・その他コバさんの手足となり、その明晰、沈着さでしっかりと職務を全うした。

4月17日松本駅のホーム、白い箱の中に入った国啓さんがお兄さんに抱かれてもう、汽車に乗ってしまっている、送別の歌を皆で歌った。大きく歌ったモクさんの声も聞こえた。「夕暮るる」「雲にうそぶく」「春寂寥」



36年度春山合宿  
中央アルプス空木岳から西駒岳ポーター  
ベースキャンプにて

伊那での生活では何をおいても三戸お恵さんとの出会いだらう。どぶろくのお恵と恐れられた彼女は、青森出身、昭和37年林学科、初の女子学生であった。晴れて2人が結婚にたどり着いたのは、お恵さん卒業の3月で、浅田教授ご媒酌により春浅き西駒演習林宿舎で挙行された。

当日は桂の梢のさらに上からチラチラ輝きながら舞い降りる雪の結晶に、モクさんの喜びははちきれんばかりの笑顔が

忘れられない。

万博前年に中沢君（農35年）とモクさんのお世話で、小生京都の植木屋に落ち着いてから、愛の巣へ押しかけても、2人共にこやかに迎えてくれ、それから40年、家族ぐるみお世話のなりっぱなだった。

我が愚息を京都の立派な親方に紹介してくれて、出島グリーンが今に至っているのも、全くモクさんの愛情の賜物と深く感謝している。

中原寮の釜の飯仲間の第1回「古い顔の会」は、一切合財モクさんが世話役になりきり、すばらしい一瞬であったが、去年11月29日第4回は、何と「寺田君を偲ぶ会」になろうとは、誰が予測できただろう。

お恵さんからいただいた、たっぷりの銘酒をみんなで献杯、みんなで語らい、みんなで歌った。彼と歌った「山の娘ロザリア」「スキーの歌」…君と一緒にあの山、この森、まだまだ行きたかった！ 酒を酌み交わしたかった。思い切り歌いたかった。いつか自分も追いついて、鬼を集めてデカンショするか。



## 寺田雅治さんを偲んで

池田 直弥  
（学士山岳会会員）

思誠寮（彼の大学1年）時代は、各部屋を覗きまわり、タバコのシケモクを漁って美味そうに喫煙していたため、あだ名が「モクさん」とついたものと思っている。

農学部（伊那市）に移ってからは、葛西さんのもと農家の一軒家「緑の館」で寝食を共にした間柄だった。大学卒業（私より1年早く卒業）後、彼はどこへ就職したのか、子供は何人いるのかなどの個人的なことはいっさい知らずに過ごし、



【氷河の氷舌の真下にて 左端が故寺田氏  
（1995/4/30）】

1995年のゴールデンウィークに40年ぶりで「ランタン谷トレッキング」の際に、再会した。

学生時代より付き合いっていたあの恵子夫人と共にランタン谷トレッキングに参加していた。学生時代のスリムな体型はどこえやら、メタボ気味の体型でカメラザックを背負い写真を撮りながらも、恵子夫人とテントを共にし、フーフー歩いていたことを思い出す。



【ホテル待合室にて 右端が故寺田氏  
（1995/5/7）】

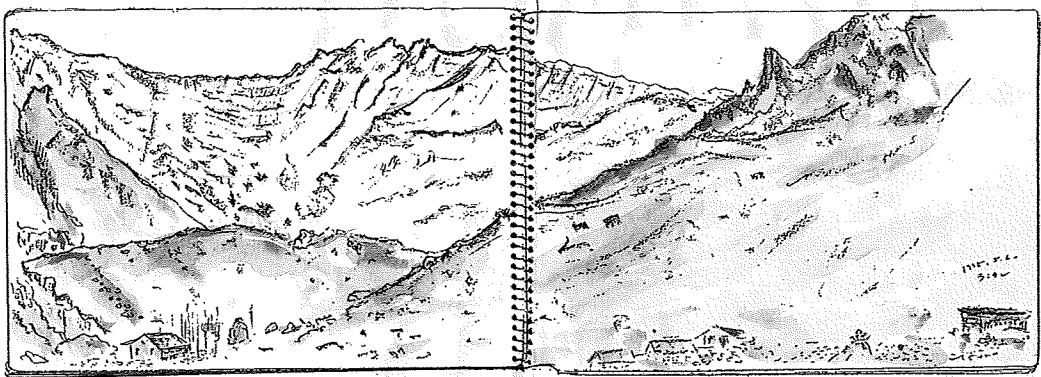
老夫婦そろって海外のトレッキングを出来ることは、それまでの夫婦関係の良さを象徴するもので、羨ましき人生を送っている証拠でもある。そんな彼が念願の「アンナプルナ山群一周トレッキング」を終えたばかりの帰郷の列車（10/19）

の中で一人息を引き取ったと言う。「願わくば 桜の下にて 春死なむ」と歌い、そのとおりになった西行にも匹敵する死に方で、考えようによっては、羨ましい限りである。昭和35年入部組で故小谷氏に次ぎ「あの世」に旅だったが、死に方で彼を凌ぐ人は出ないような気がする。

当地は、東北の片田舎ですが、アカディミショー海外部門を初受賞した映画「おくりびと」の舞台となった鳥海山・月山の山麓で「即身仏」や「草木塔」に特化し

ている地方ですが、民間伝承として「死者の魂は没後40年間近くの山（端山）で、生前縁のあった人々を見守っている」ということなので、トレッキングで縁のあった方々に目をかけて下さい。

彼との思い出として、ランタン谷トレッキングの帰国後の写真交換時に、彼から送られてきたスケッチ（1995/5/6作成）はすばらしく、記念にこの稿に掲載し、ご冥福を祈ります。



梅雨あけの待たれる此頃、皆様お変わりございませんか？  
当方、下界に降りましてから多忙を極め、楽しかったトレッキングの思い出の整理も出来ぬまま、また新しい月となってしまい心苦しく思っておりました。皆様方からのお便り、写真、記録等々有り難く受け取りながら、「奥さんの仕事だ」「いーえ、先輩をさしおいてなんて」とか、互いに譲り合ひまして今となってしまいました。ただ一つ自慢できますのは、「山行の名残りの髭」がすっかり揃いまして、風格？も出てきたそうで（周りの人々いわく）一人「えつ」にいらしているきょう此頃です。

श्री-राधा

Y. Terada

“世界で一番美しい谷ーランタン”ほんとうに雄大ですばらしかったですね！そそり立つ山々の威容もさることながら道すがら、ひっそりと咲いていた桜草、三寸菖蒲、ペンげい草、咲き誇る赤、白、桃のしゃくなげの花々、鳥たちの囀り、ヤクの優しい目と柔らかな毛並み、とろけるようなヨーグルト、谷をふきぬける風の匂い……五感にしみいる思い出です。 そんな生活が体に良かったのか、帰ってから？kg軽くなり数年前のジーンズがはける！とホクホク顔じじむさい髭の旦那さんとは、目下“コーラ”が正確には谷か川か？でもめている最中です。

श्री-राधा

KeiKo.

## 寺田雅治氏を偲んで

福与 邦夫  
(学士山岳会会員)

この旅の急死はなんとも悲しいことです。

張り切って行ったネパールから戻ってもうすぐ帰宅という時にまさかの急死とは。

当日のことはHP「春寂寥」にてそれとなく知りました。



詳しいことは伝わって来ないのであるOBに尋ねましたところ電車内で息を引き取った旨をメールで伝えてくれました。

もう寂しくて寂しくてなりませんでした。

それにしても自宅の戻れば奥さんがおかえりなさいと言って笑顔で迎えてくれたのにそれもせずに旅立って行ってしまおうとは。

第3チームに自ら参加して困難な遠征を続けていてそれが無事に終わってやっと帰国して我が家に戻る寸前での他界というのはだれも予想すらできないことだったでしょう。

10月20日のお通夜は100人近くの方が参列されたと聞きました。

翌日の本葬にも多くの皆さんが参列してお見送りしたということです。

その席の奥さんの言葉の中に「この後にオーロラを見に行こうと約束していました」

旨の挨拶があつとこともお聞きしました。

それらが果たせずにさぞや残念だったことでしょう。

今は風になってあの歌のようにわたしたちを見守っていてくれることを信じます。

安らかに、どうぞ安らかにお休みください。

ここで思い出を少し綴ります。

寺田さんとは学部は違いましたが同期生でした。

付き合いが始まったのは95年4月26日～5月8日（13日間）のネパール・トレッキングでした。

この隊は今は亡き小川勝氏が信大OB会の有志を募って隊を編成して行ったトレッキング隊でした。

・参加者 小川勝 久田千成 寺田雅治 寺田恵子 出島五郎 岡崎猛 葛西正美 池田直弥 御子柴三男 柳沢勝輔 奥嶋啓志 小林盛男 今関貞夫 福与邦夫 西郡光昭 西郡 綾 飯塚とみ子 千田早苗 遠藤昭治（19名）

・コース カトマンズ＝ランタン谷＝ヤラピーク（5,520m）登頂＝カトマンズ

・申し込みのまえに小川氏から届いた私信です。

「どうですか、豪華メンバーによるすごい計画でしょう。お迷いとのことですが迷うことはありません。このチャンスを逃がしたら2度とこのメンバーでは行けません。もうお名前は既に名簿に入れて航空切符の手配をしています。」

- ・この隊に参加したことで寺田ご夫妻とは随分と親しくなりました。約2週間山地でずっと寝食を共にする中で 交流を深めることができました。
- ・これを契機にそれ以後の会合では寺田氏とはすぐに隣席になって話し合いました。
- ・山田哲雄先生の会。美鈴湖のOB総会。乗鞍のフレンズ岡崎荘。遠征隊実行委員会。松本での壮行会。徳本峠の会等。  
こうした時にはいつもいつもとなりには寺田氏がいてくれました。 合掌

## 寺田雅治さんと「乗鞍」

岡崎 猛

(ふれんず岡崎主人、学士山岳会会員)

突然の訃報から3ヶ月、まだその悲しい現実を信じることができません。

私と寺田さんとの出会いは、あまりに古く、1964年（昭和39年）、彼が4年生の冬に、旧乗鞍ヒュッテに山岳部の人たちと訪れてくれた時だったように記憶しています。

その時以来40数年のお付き合いでした。

卒業されて少し空間がありましたが、年末年始には、ご家族お揃いで乗鞍へ足を運んで下さいました。扇能 清氏ご夫妻や、今は亡き小川 勝さんらと、昼間はスキー、夜は懇親会（勿論アルコール付き）に盛り上がり——という恒例行事？ が10年以上も続いたように思われます。楽しく賑やかに、そして寺田さんのあの豪快な笑い声が今も印象に残っています。彼のお子様がそれぞれ独立された後も、ご夫妻で毎年のように訪ねて下さいました。



懐かしの徳本峠会の皆さんとフレンズ岡崎の前で

2004年（平成16年）3月30日、ご夫妻とともに上高地へクロスカントリースキーで赴きました。旧釜トンネルが最後の年でした。静かな河童橋から小梨平キャンプ場へ。帰路、霞沢で芽をだしたばかりの「フキノトウ」を見つけ“雅治はこれが好物！”と奥様の恵子さんに言われ、沢山摘んで帰りました。夜は「肴」となったことは申すまでもありません。そして今となれば、こ



の日は寺田さんとスキーをした最後の日となりました。

その後も、山岳会の「乗鞍～上高地」の企画には参加され、一緒に飲む機会はありませんでしたが、今はそれも出来なくなり淋しい限りです。

今回の信大60周年記念事業に参加された「ネパール・トレッキング」の思い出話を、お聞きすることもなく、天国へ召された寺田さん！ 長い間、乗鞍を愛してください、また数々のご厚情を賜り本当にありがとうございました。どうぞ安らかに眠りください。

はるか乗鞍より心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

## 食っちゃ寝

扇能 清  
(学士山岳会会員)

10月19日の午後、留守本部の立場上松尾さんに電話をした。「第一隊他数名を残し、全員無事に帰国」とのこと、ところが夜になって「全員無事ではなかった、寺田さんが関空特急“はるか”の中で亡くなった」との知らせを受けた。

数年前から足に重りを付け毎日10kmは歩いていると言っておられた寺田さんは、新年会やいろいろな所でお会いすると、少しスリムになられて大変元気そうであったのに。小川さんの追悼文の中でも、「また来世があるとしたら、山行や旅を続けたいですね。少々長くなりますが待っていてください」と結んでおられたが、2年にも満たない大変短い時間であった。

今は心より寺田さんのご冥福をお祈り申し上げます。

20年以上も前、寺田さん家族、平さん家族、扇能など8人で5月の大型連休に立山へスキーに行った。

入山の日快晴、雷鳥荘に泊り翌日からのスキーを期待して眠りに就いた。明日からの天気は悪いとの予報であったが、起きてみると予報通りの雨。仕方なく山小屋の早い朝食を食べビールを飲んで少し話しこみ、温泉に入って部屋に戻り眠る。それでも昼ごろになると腹が減ったと起きだし、持ち込んだ行動食をつまみに飲んで少し眠る、夕食には飲みながら時間をかけて食べるが、そう長居もできず部屋に戻って、「今夜眠れるか」と心配しながら早くから眠る。次の日もその次の日も同

じように過ごした。しかし、3日目の夕食時にはノンベイ達も飲み疲れ「酒はいらん」と喫茶室でコーヒーそして眠る。

寺田さんは大変仕事に忙しく貴重な休みだったと思われるが、連日の雨でも、山の中に居ること、山の中で寝ることだけでも楽しいとご機嫌であった。確かにそのように思っておられたのもあろうが、少々減入り気味の皆への元気づけであり、場を明るくしようとする配慮だったようにも思う。

下山の日は快晴、御山谷を滑るのであるが昼食が無い、一の越山荘でカップヌードルを買い食べる、何時もは行動食がかなり余るのであるが今回は食べつくした。

3日間位ならいくらでも眠れる、寝ていても腹は減ると、全員で悟った次第。最終日はいつものように快適な御山谷の滑走で、全員満足したスキー行であった。

## 先輩・寺田雅治さんの思い出

小根田一郎  
(学士山岳会会員)

初めて寺田さんにお会いしたのは、はるか前、京都での関西支部の新年会のときだった。関西支部の輪郭と、新年会を京都と大阪とで交代でやることとが大体定着しだしてきた頃である。西郡さんなどと同年代でかなり上の先輩、京都で会社の社長をされている豪快な先輩…、という認識だった。会を重ねるうち親しくして頂くようになっていった。あるとき、スキーか何かで脚を骨折し、ギブスのまま新年会に参加されたことがあった。そして、二次会の店に移動するとき、皆で交代でおんぶして担いだ。寺田さんは大柄であったため、それは大変だった。最終区の店までを私が担当した。皆に配慮して黙っておられた寺田さんが「オネちゃんが一番安心してられるよ」とお世辞とは思われない口調で言って下さった。ちょっとうれしくさせる一言だったが、このように寺田さんは人を喜ばせるやさしさを持った方だった。

乗鞍に珍しく家族を連れてスキーに行ったことがあった。寺田さんもお家族と従業員らと共に来られていた。岡崎さんのフレンズである。スキーの巧い寺田さんに私の滑りを見られないようにした積もりだったが、やはり見られていたらしい。その後、滑りは“も一つ”である旨を婉曲表現で言われてしまうことになる。自分の子供らをほったらかしていたら、寺田さんが面倒をみて下さっていた。奇しくも、この年の秋に遭難してしまうことになる御子柴さんも長男の雄一君を連れてひょっ



こり現れ、一晩泊まって行かれた。

その後、しばらくお目にかかれない期間もあったが、再び京都の新年会の定例メンバーとして定着された。ゆっくり落ち着いて、又生き生きと人生を楽しんで暮らしておられるご様子だったのに…。

最後に、アンナ周遊での雄大な景色に触れられて、ご満足であったことだと思う。

2010年1月27日

## 寺田さんを偲んで

三坂 岳応  
(学士山岳会会員)

1980年4月、全く思いもしなかった本山塔頭住職として京都に赴任する事になり、しかも3~4年のはずが結果的に14年間いる事になりましたが、山岳部で同期あるいは前後の学年だったOBが、ちょうどその頃けっこう関西地域に住んでいる事を知りました。最初は、長島さんが大阪女子マラソンに出るというのでそれをダシに集まった訳ですが、名簿作り（その後SAAC全体の名簿作りに発展）と平行して多くの人が集まるようになり、新卒を含め世代を越えての交流になりました。

最初の内は会場を京都・大阪・神戸で年毎に持ち回っていたものの、何しろ延々と飲みたい集団ですから、二次会以後も含めて長時間落ち着ける会場の確保が大変で、現在のように「京都の真ん中」で「ホテルに1泊」で行う形に定着しました。

その間、寺田さんはほとんど皆出席だったのではないかと思います。私の世代にとっては現役時代一緒に登った事が無かった大先輩だったにもかかわらず、何かと気配りを頂いて一番身近な先輩になったように感じられました。年長者で京都在住という事もあったでしょうか、会に対してはもちろん、私的にも先に亡くなられた牧さんの雇用などいろいろ便宜を図って頂きました。

まだ子供が小さかった頃は親子参加で六甲山や京都北山の一角でキャンプを楽しんだ事もありました。その子供達ももうすっかり成人して結婚、子の親になっている人もいます。私自身も昨年還暦を迎えました。それだけ年月が確実に流れ、親の世代は年をとった訳です。

2009年のネパール遠征は画期的な企画でしたが、蓋を開けてみれば私の世代よりもっと年配の人達が大勢を占めている事に正直驚きました。しかし考えてみれば、



その学生時代は、現在と違いまだ海外渡航に大きな制約や困難を伴った時代で、大きな夢を抱きながらも実現できなかった、その思いが結集してこそ実現されたのではないか、と思います。

今年の関西OB会ではきっとその話で盛り上がるでしょう。その中心に寺田さんがいらっしゃるはずでしたが、それが叶わない儚さ寂しさを禁じ得ません。皆様の思いも同じだと思いますが、長年温め続けた大きな夢を実現した安堵の中で眠りに就かれたのが、せめてもの幸いだったのではないかと…ご冥福をお祈りいたします。

## 寺田さんとの思い出

加藤 宜機

(大学友人)

昨年の10月20日、奥嶋さんから寺田さんの訃報を聞き愕然とした。

伊那コマクサ会の幹事長役をその前年（平成20年）に快諾してくれて、元気そのものだったのに。

ひとり減りふたり減りして半世紀、遺されしもの悲しみ深し。奥底の記憶から寺田さんとの思い出を抽き出す。それは信大2回生の夏休みに遡る。

時は昭和36年7月21日～8月20日の1ヶ月間、所は三重県の御在所岳の麓の町菰野町である。

昭和36年6月の梅雨どき伊那谷は1週間降り続いた大雨に見舞われた。このため、天竜川流域の各所で土砂崩れや土石流が発生し、多くの住家に土砂が浸入した。我々学生は中川村、長谷村、一之瀬村等に出かけこの土砂排除に汗を流した。今でいうボランティアである。その雨は同じように三重県の鈴鹿山系にも降り注いだのであろう。

三重県には先輩諸氏が奉職していることもあってか、堀内先生の厳命により寺田さん、岡さんと小生の3名が実習、研修をかねて三重県砂防課に出向くことになった。

そこからさらに菰野出張所につれていかれた。当時の砂防ダムは石積のものもあってか、出張所直属の職員として石工さんもおられた。この出張所で一通りの挨拶を終え宿舎に荷を置いた。宿舎は「とらや」という商人宿であった。明日からの本格的な実務を期して2階の広間に寝転んで、ふと窓の外の大樋に目をやると長さ



2mはあろう堂々たる体躯のヤシキマワリが身をひきづって我々を迎えてくれた。この日以後、現場で蛇との対面がない日は一日として無かった。この現場までは、出張所のオート三輪車の荷台に乗せらての送り迎えであった。

仕事を終え宿舎に着いての夕食時も、その後の就寝までの時間も一杯やることもなく寺田さんを中心に語り合った。寺田さんからはトルストイやカミュについての文学論を語ってもらった。こういう寺田さんの姿を見ると自分より遥かに大人に見える感心したものだ。

河川測量を一通り終え崩壊地調査を始めた。寺田さんと2人1組で沢という沢、谷という谷をくまなく歩いた。寺田さんはとても地質学に精しくよく教えてもらった。

しかし調査の方はさして学問的ではなく、崩壊地の規模等を写真に撮り地図上に示すという内容のものだった。

ある日小生が腹具合を悪くし高熱をだした。赤痢を疑われ戸外で便を医者や寺田さん達に診てもらった。激しい震い気に襲われ幾枚も蒲団をかけてもらい看病してもらった。

さいわい急性腸炎で一日休んで回復した。

寝食を1ヶ月共にし心の通じ合いがもっとも大切であることを寺田さん、岡さんから教わった。

寺田さんとの最新の思い出は伊那コマクサ会でのことである。

伊那コマクサ会にはいつも顔をだしてくれた。第3回（平成20年）には幹事役をひきうけて、会場に赤井先生をよんでくれた。懐かしさがひとしおつのがった。会の締めは寺田さんの音頭で赤井先生を中心に寮歌をうたった。蜜声を張り上げ皆が肩を組むと一気に青春が呼び起こされた。この席で第4回を松本市内で行うこととした。

第4回（平成21年11月3日）の松本会場は幹事長（寺田さん）が欠けたせいであろう、しんみりと終わった。しかしこの席で第5回は「古い顔の会」と合同で行うこととした。

伊那コマクサ会の充実への地歩を固めてくれたのは寺田さんの功績である。寺田さんの言動から、彼の今までの人生の中で体験した懊悩や苦勞をばねにしたたくましさ、力強さを感じた。

寺田さんの遺志を受け継ぎ伊那コマクサ会を新しいエネルギーの源としていきたいと念じている。

ヒマラヤの天空かざる雄姿こそ 気味の越し方 君の行く末

仲間を、後輩を見守ってください。

平成22年1月22日

## モクさんのことあれこれ

中澤 清栄  
(大学友人)

### 「ふるい顔」

五郎ちゃんの家遊びに行ったとき「昔の懐かしい友達と会いたいなー」五郎ちゃんの提案にモクさんがそれはいい、やろう。

当然世話好きのモクさんが代表世話人をする事となった。又そういう事が良く似合う男。リーダーシップの素養は常に備えている男だった。この会に出席する時、いつもモクさんの車に乗せてもらっていった。二人だけのとき、山岳の話は殆どなく、ごく自然な生き方、家庭のこと、世間のこと、会社のこと、学生時代のこと、お互いツッパリはなく、素直な気持ちで接し合え、弱みを見せ合うよき友だった。

### 「笑顔のモクさん」

夢の中にモクさんが出てきて「中澤ハーモニカ聞かせてくれ」笑って言った。2010年1月17日、向日町のモクさんの自宅を訪ねた。お恵ちゃんが駅まで迎えに来てくれた。3時間程仏壇の前で思い出話を色々した。部屋の雰囲気明るかった、じめじめしたものが微塵もなく、モクさんとお恵ちゃんがそのままいる、そんな感触、

「本当に山が好きだった」「草花のことで良くいいあいをした」「趣味が一緒という事は素晴らしいことだよ」「只一緒に飲みながら話できないのが寂しい」「モクさんは激動の人生を送ったけど幸せだったとおもうよ」「少し短すぎたけどね」「企業人として俺にはできない事をやりとげた、立派だよ」「家族も大切にされた」「お恵ちゃんに涙はなかった」

ほんとうに仲良かった二人に美しい笑顔をみた。最後に仏壇の前で思い切りハーモニカを吹いた。「山男の歌」「ふるさと」「赤とんぼ」。モクさんがいった、ありがとう、又きてな。帰りの電車の中で思った。二人はいつまでも二人。

### 「木曾の御岳さん」



2009年7月モクさんとの最後の出会い。計画したのはモクさんでモクさん、お恵ちゃん、出島五郎ちゃん、自分の4人。五郎ちゃんが元気なうちに一度頂上まで上りたい。生きてる内。五郎ちゃんの家にお世話になり前日は良く飲んだ。山の話も良く出た。青春時代にもどった。五郎ちゃんとモクさんに山岳部のラスト侍を見た。そこには美しい山岳の美学が一杯だった。ワングル部の自分には山岳部の固い絆と今も続く友情に生きてることの素晴らしさを笑顔で感じた。天候と体調で山頂までいけなかったけど。モクさんの登山姿はいつまでも、忘れない。思い出をありがとう。

### 「愛妻家モクさん」

みなが知る、学生時代からのお付き合い。お恵ちゃんと本当に仲の良いご夫婦。お恵ちゃんと話した時、喧嘩をしたときも翌日ケロツとしているそう。寂しがりやで一人ではおれない。こうときめたら曲げない。弱みは見せない。よくしゃべる。思うように生きてと思いますよ。

俺はいった。モクさんは俺と違って浮気ができないタイプ、男の中の男かな、いつも話題の中心にいる男。気配りの豊かな男、笑顔が似合う男…

夫婦で趣味が一致すること、これ素晴らしいこと、山登り、自然鑑賞、旅行それぞれにお酒。特に一番の楽しみは毎晩夕食時に二人で時間をかけて話しをしながら3時間程飲むそう。

お恵ちゃんが言った、今はそれが寂しい。俺は言った。こんな夫婦俺の知る限りいない、お互い同じ大学を出て、恋愛をして、趣味ご一緒でずーと仲良し、幸せもんやでー。

お恵ちゃんに質問した、もし、生まれ変わったとしたら誰と結婚したい。

お恵ちゃんは言った。やはりこの人。天国でモクさんがにっこり、おれもや。

### 「一平」のおばちゃん

伊那市錦町におばちゃんのお一杯飲み屋がある。学生さんのたまり場だ、モクさんとは良くそこで出会ったものだ。

丁度おばちゃんの年と偶然にモクさんの母と自分の母と同じ年だった。お互い酒も程ほどのノンバー同士。モクさんはあまり乱れることなかったが、なぜか五郎ちゃんを含めて気があった。モクさんは俺の言うこと聞かなかったが、おばちゃんの言うことは素直に聞いた。娘さんの勉強を熱心に教えていた。おばちゃんが唯一認めた先生だった。

おばちゃんが言った。「ほんと寺田さんは口はうまいし頭もいい。五郎ちゃん、中澤さん学校行ってるのかね、親が嘆くよ」

二人で言った「モクさん社会に出たら、出世するぜ。」ほんと、実社会に出て、一時代を築いた。おばちゃんのみは当たった。

モクさんがなくなる1年前にも、一平のおばちゃんに会いに行こうとモクさんの呼びかけで会いに行ったことが、懐かしい。その時のモクさんは本当にうれしそうだった。

### 「実業家モクさん」

学生時代を終え共に社会人となり、お互い民間会社に就職した。

モクさんは当然京都出身だから京都へ、群馬出身の自分もなぜか京都の会社だった。

モクさんは舗装会社、俺はコンクリート製造と建設業を営む会社、ま、お互い土建や。度々出会って、一杯飲み交わした。モクさんは、実業家としてやり手だった。俺と違って使われるタイプではなく、頭もよかったし、洞察力もあり行動的だった。

しみじみいった事がある。「俺京大に入りたかった、信州大から京大大学院へ行き学者になりたかったんや」

まだ元気なころモクさんの会社を訪問したことがあった。300坪の自社保有の土地に二階建ての事務所と研究室を兼ねた作業所が建っていた。50人程の社員を抱える株式会社の社長である。裸一貫でたいしたもんだ。俺は褒め称えた。将来のこと、今の事業のこと、海外技術導入のことなど色々話してくれた。

俺は言った。立派なもんだ、自力無一文でこれだけできる同級生はいない。色々事情があり激動の人生を送ったが、実業家として一時代を築き上げた才覚には頭がさがる。売り上げ年商30億の実績を上げてイヤー、登山家として立派だが実業家としても立派。

## 誇り高き京都人

仁井 皓迪  
(大学友人)

寺田君との出会いは思誠寮入寮面接時に遡る、上州生まれにとっては何とも鼻もちならぬ京都弁でまくしたてている輩が数人いたその中の一人であったと記憶して



いる。そんなこともあり、松本での一年は先ず言葉すら交わす機会もなかったしこちらから敢えて近づこうともしなかった存在である。

それが何の拍子か判らないが、伊那中原寮では同居人となってしまったのである。山行きを共にした記憶があるわけでもなく、と言って飲み仲間であったわけでもないのにどちらで、同居人として指名したのかも判らない。そんな同居人と過ごした中原寮での数カ月は鮮烈に青春の思い出として脳裏に残っている。

学科が農学と林学と異なることから共通の話題は専ら文学なんて言うにはおこがましいのであるがこの時期は比較的の本は読んだのは彼の感化によるものと思っている。麻疹的に誰もが通過していくお決まりのコースで、太宰 治にかぶれその退廃をチョッピリ真似てみたり、「三太郎の日記」、「ジャンクリストフ」、「チボー一家の人々」等を回し読みしたものだ。常に人より一足先んじないと気が済まないところがあり、その陰での努力は怠ることが無い男であった、これは学窓を離れて京都を根城にした生活の中にも反映されていたことと思う。寺田君（モクサン：シケモクを集めてのヘビースモーカー、ということにつけられたあだ名であるが、何も彼に限ったことではないが、貧しい寮生活を経験した輩はみんなシケモクにお世話になっていたのである。）と過ごした日々であって、隣人の存在を語らない訳にはいかないのである。

佐藤雄一先輩（ユウイツツアン：寺田君が命名）・出島五郎君である、夜な夜な隣から壁を叩く誘いがかかる、隣へ行くと佐藤先輩の郷里仙台からの差し入れの「MJB」のコーヒーが味わえるのである。また、ある時は「大松」に酒買いに行かされて俄かに酒宴となる、両氏ともに本に親しむことを好んでいた、佐藤先輩からはこれを読んでみると数冊の本をいただいた記憶がある。寺田君も山岳部の先輩でもあるユウイツツアンの感化を得たものと思う。

さて、寺田君との一つの約束は今年の「古い顔の集い」の案内をもらった時の話であるが、俺もフルートをやったことがあるので一度合わせたいねと言っていたのであるが、後日恵子夫人によれば、最後となったヒマラヤトレッキング最中になぜか一本のフルートが出てきた事を覗いて何とも無念さが残る。そして、今年の「古い顔の集い」のお膳立てをしたまま、ヒマラヤを凌ぐ高嶺へ旅立ってしまったのである。告別式の祭壇に飾られた遺影を目にした時「誇り高き京都人」を見たの

である。

## 顧問を偲んで 寺田雅治様

芳末 健二

(タチバナ・グループ代表取締役)

敬愛する寺田さまが鬼籍に入られて早や2ヶ月ですね。

振り返って見て顧問には弊社グループの環境・土木部門のエキスパートとして、公私一方ならぬお世話になりましたことに感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

寺田顧問の同期の親友である木村 實氏（弊社不動産部長）とのご縁で、京都の花街での出会いが始まりです。…

経営されていた、明成エンジニアリング(株)が隆盛期でよき時代でありました。

やがてバブルはじけて、木村 實氏亡き後の始末で彼の家と関係者の方の家まで守ってあげられ、親切で豪放いらくなお人でした。加えて幼友達を守られた男気と友情と心使いには、頭が下がる思いで教えられました。

顧問との思い出を綴ってみました。荷物はオール、アルコールといういでたちのハイキング会で、それも初めての山歩き参加者の多い集いでした。

○六甲縦断コース・昼食後のアルコールの勢いで、もう少し!! もうそこだ!! と、騙され乍ら引率してもらい…無事到着!! 夜は酒盛り!! 楽しい一日。

○ポンポン山…エベレストの勇者が不覚にも飲み過ぎて『コブラガエリ』でダウン、それ!! と、ばかり記念写真!! その名誉ある写真を投稿したく探しましたが…。

○近郊の山…マドンナの奥さんもご参加いただき、『食糧難でも自然の恵みで生き残れる』と、山菜取りの名人山の幸を天ぷらにしてもらってのビール乾杯の味!! その醍醐味を忘れられずに、近々にと約束していたのに!! 残念です。……マドンナを射止めた語り、盃かさね……



○山男と沖縄の海へダイビング…酒豪連メンバーのお嬢さんが、潜りのインストラクターを沖縄でやっておられるので、行こう！ 泡盛を楽しみに出発！！『前日からお酒を控えて、海を甘く見たいかん！！』とFAX入り空港に着くなり、「飲んでいないでしょうナ！！』と注意を受け、平均年齢60歳…？ 初体験ばかりで！！ メタボでスーツの脱着に往生して！！ 海蛇に遭遇も、躰はままならず…！！ その夜の泡盛の古酒の美味かったこと。その時の寺田顧問の満面の笑顔…思い出つきません。

その笑顔 満天の星 泡盛とやさしさと笑み豊かな顧問を偲んで  
（宗正修寺・緑の里にはほほえみに地藏を祭祀したい。）

少々遅れていきますが、楽しみにしてよい席を取っておいて下さい。

合掌

## 顧問を偲んで

菱田 明彦・那美子  
（隣人）

私は脳梗塞で倒れて以来、車いす生活で歩行も困難で出不精になりました。

私の隣家のご夫妻はそれは親切で私の出不精を懸念してか  
「一度ドライブにでかけませんか」  
と訪れ妻は即座に同意しました。

昨年4月下旬一寸左足がぎこちなかったのですが私達は車上の人となりました。  
初めはてっきり山菜取りに行くのかと予想していましたが、それが京都縦貫自動車道を北上し、京都八木町で降り日吉町日吉ダムを見学そして美山町の世界遺産の白川郷に似た萱葺きの家群を感動しつつ次へ向かいました。

大堰川源流を眼下に見つつ休憩所で昼食を戴きました。

昼食後少し休息し出発して佐々里峠付近の道路に残雪があり、ご主人がその雪を私の手のひらに乗せ少年時代の感触を体感させてもらいました。

終日北山方面を一周し帰路につきましたが、車の乗り降り等全てにおいて介助し



てもらい隣のご夫妻に感謝の気持ちが一杯で故事いわく「遠い親戚より近くの他人」が人情の暖かさをひしひしと感じ感謝・感激の極みでした。

そのご主人が信州大学山岳部のOBで一カ月程ヒマラヤへ登山行きをしておられ帰路急死されました。

良き人は早死にすると云われておりますが非常に残念で誠に痛恨の極みです。

ご冥福をお祈りするばかりです。

## 寺田さん 追悼文

吉岡恵津子  
(友人)

寺田さんの訃報に接したとき、非常に驚き、同時にかすかな後悔を感じました。

普段めったにお会いする機会はなかったのですが、たまたま昨年2月、もうひとりの女友達とともに我が家でゆっくりおしゃべりする機会がありました。そのとき、信大山岳会の記念事業でヒマラヤへ行くと聞きました。ちょっと緊張した面持ちで、ハードそうなトレーニングをしていることなど話してくれました。その後一度もお話する機会がなかったので、もうそろそろ帰国されているかもしれないから一度連絡したいと思っていた矢先のことでした。こんなことなら、出発される前に電話でもいいから、お話すればよかったと。

寺田さんとは小学校、中学校、高校とずっと同じ学校でしたが、親しく話したり遊んだりするようになったのは、高校2年からでした。よく数人で近辺の山へ行きました。

京都の北山、滋賀県の伊吹山や比良山など。いつも彼がリーダーでした。夏、伊吹山へはテントを持って行き、夜から登り始め、山頂付近にテントを張り一泊しました。朝、人の声で目を覚ますと、なんと道の真ん中にテントを張っていて（夜テントを張るとき暗くて見えなかった）、通行の妨げになっていたりして大笑いしました。その後は、暑くならないうちにと、夫々一目散に山を駆け下りました。大学2年の夏休みには、彼のいる信州の高原を、やはりテントを持って歩き回りました。そのとき、一晚信州大学の男子寮に泊めてもらったことがありました。朝、洗面に行くと、いるはずのない二人の女子学生がいるので、寮に残っていた男の人が「う



わーっ」とびっくりして逃げていったりしました。そのころ私はあまり体力がなく、自分の荷物さえ持てないことがあり、後々彼から「よく荷物持ちをさせられたねー」と言われたことがあります。彼がいなかったら山行きなど考えなかったかもしれません。いつもしっかりと計画し、われわれを引率してくれる彼には、絶大な安心感や信頼感を抱いていました。

悩みも多い多感な高校時代でしたが、自由な校風のもと、仲間とのびのびと自然の中で過ごす事ができたのは彼のおかげです。その後は、彼も私たちが別々の人生を一生懸命歩んだと思います。最近では、みんな第一線から退き暇もできただろうし、昔のように「～ちゃん」と呼び合って、また近くの山を散策したりしたいなと思うようになりました。それで「暇になったらまた、連れて行ってね。みんなで、いっしょに行こう」と、お願いしていたのに。

訃報に接した当初は、寺田さんはちょっと早すぎたけれど、完全燃焼し、充実した人生だったんだから…と自分に言い聞かせていました。今は、やはり早すぎたという思いが強い。かけがえのない存在だったんだということをしみじみ実感しています。寺田さんはタフだし、誠実だったので、周りの友人はピンチのときよく彼に助けてもらったようです。

もうすぐ小学校の同窓会があるけれど、もう彼はいない。

寺田さん、ほんとうにいろいろお世話になりました。ありがとうございました。

## 兄との思い出

安田 讓

私の旧姓は寺田で、寺田雅治の弟です。

私の体格は兄ほど立派ではなく、細いタイプです。

中学は算数クラブに入り、数学などが得意でした。

高校に入り、硬式テニス部に入り、筋肉を鍛え、インターハイで京都代表になりました。昭和42年、インターハイが松本市であり、信州大学出身の兄に長野県の方は親切だから、困ったらいろいろ人に相談したらいいと言われ、安心して松本での試合にいきました。

旅行など、当時はあまり出来るものではなく、助かりました。

行きの列車で、塩尻で釜飯を買いましたが、その釜飯を列車の座席の横にある台

に置いたのですが、たまたま落ちてしまって、私の座席の前におられたカップルの男性のつま先にあたり、謝った記憶があります。

相当痛かったと思います。当時はのんびりした時代でした。

また、小学生時代、兄の親友の中川さんと私と三人で大文字山に登った記憶も懐かしく思われます。

9歳年上の兄や中川さんは、小さい私にとってはとても偉大な感じに映りました。

山頂近くの大きな岩の上に一緒に登り、飯ごうのご飯でカレーライスを作って食べた味は格別でした。

当時はレジャーも盛んではなく、貴重な経験でした。

さらに、一度兄とスカラ座へ映画を一緒に見に行った記憶も懐かしく残っていません。

見に行った映画はポンペイ最後の日と思いますが、たまたまヌードの映画も短時間やっており、兄が小学生に見せるものではないので困った様子をみせていたのが印象的でした。翌日、小学生の友達にその映画の話をしたら、クラス中で大騒ぎになりました。懐かしい思い出です。

さらに時間をさかのぼって私が小学入学前でしょうか、私には記憶がないのですが、私の姉に聞いた話です。

兄弟で加茂川に泳ぎに行ったとき、私の体に蛭がつき大変だということで、兄が体についた蛭をとってくれたとのことでした。

蛭はとても触れるものではなく、兄が勇気をだしてとってくれたのです。

このように、私の小さい頃は兄が中心的な存在でした。

今まで、時間をさかのぼって記憶をたどりましたが、この6年間のことに話がもどります。

というのは、6年前に私は病院をやめて、医院を開業することにしたからです。

30年ほど病院勤めをしていたので、銀行で融資を受けることや、医院の工事のことなど全くわからないことだらけでした。未知との遭遇でしょうか、兄にいろいろ助言を受け助かりました。

兄には高血圧や高コレステロール血症があり、私が薬を出していました。血圧やコレステロールは正常になっていました。



ヒマラヤに遠征するとのことで、必要な医薬品や血圧計などを手配しました。10月19日に帰ってくるとのことで、帰りを待っておりました。10月15日頃でしょうか、私の医院の屋根の上や、周りのビルの屋上にカラスが50匹ほど、午後5時頃になると集まり、一斉にカアカアと鳴くではありませんか。

カラスが医院の屋根をコツコツついているのを私の妻も聴いています。

近所の人や、医院の医療事務の女性も何でしょうか、気持ちわるいですねと言っていました。

この現象が3日間続きました。

そして、京都駅の近くの赤十字病院に運ばれたとの電話が19日、夕方にかかってきました。

病院に駆けつけたときは、もう亡くなっていました。

救急の先生に心臓のエコーを見せてもらいましたが、心臓の周り（心臓の周りには心膜があり、そこに血や水分が貯まることを心タンポナーゼといい、大量に貯まると心臓は拍動できず、命にかかわります）に厚さ1cmの血の塊がありました。

たぶん、心臓を出た直後の大動脈の壁に亀裂が起こり、そこを心臓方向に大動脈の壁が解離し心膜の内側に血液が貯まったものと考えられます。

兄の顔を見ていますと、苦しんだ様子もなく、今にも起き上がって話でもしそうな様子でした。

兄が亡くなって数日後、私の家の壁に変わった虫がいるのをみつけました。このような虫は今まで見たことがなく、デジカメで写真をとりました。

後で調べたところ精霊バツタでした。

兄が、会いに来たのでしょうか。

長年の夢であった、ヒマラヤへ遠征できたので、兄も幸せであったと思います。葬儀の最後に皆様が歌われた歌には哀愁がただよい、大変感動いたしました。

## 「こわい お姉さん」の「頼れる おとうと」

片桐 展子

私は恵子の姉である。縁があつて恵子の夫になった雅治さんと「ぎきょうだい」になった。雅治さんは、同じ年の、いや、誕生月では年下の私を「お姉さん」と呼ぶことになった。初めはさほど気になることではなかったでしょう。しかし、年月

を経ても、雅治さんにとって、私はいつまでも姉であることは変わらない。一目おいて接してくれる。大切にしてくれる。けれども、煙たい存在でもあったのでしょうか？ ユーモアたっぷりに「こわーいお姉さん」という言葉が雅治さんの口から出るようになった。最初は私が研究会で寺田家に泊めて頂いたときで、雅治さんは酒気帯びてご機嫌で帰宅、玄関でごろりと寝てしまったことがあった。そこへ、私が「お帰りなさい」と声をかけた。すると、「あ！」と叫んで飛び起き、「こわーいお姉さんだ！」と自分で布団に潜り込んだのでした。以来、「こわいお姉さん」になった。

雅治さんは寺田家では大黒柱の存在で、両親や弟妹から本当に頼りにされていた。加えて、恵子の弟妹の面倒もよく見てくれて、私たちは、ついつい、甘えて頼ってきた。私の第二人は、雅治さんにどれほど支えてもらったことか、心からの感謝でいっぱいである。雅治さんは多くのひとに、特に弟妹に頼られるばかりだった。そのせいばかりではないと思うが、私とわが夫の康雄さんをいつも大歓迎で迎え、「お姉さん」、「片桐さん」と呼んで対等に対し、夜更けても話が弾んで止まらなかった。康雄さんと私は共に大学の研究室に勤めていたので、京都や奈良への出張では、寺田家を常宿にしていた。幼い息子たちを預けて学会に出たこともあり、幼い息子たちは岳嗣くんをスーパーお兄ちゃんと慕って尊敬し、家族ぐるみでお世話になった。息子たちは成長してからも、何かにつけて寺田家を訪ねていた。京都に電話したら、息子が居て驚いたことがあった。息子たちは私たちと全く別の分野へ進んだので、私たちよりも雅治さんのほうが話しやすかったようである。人生の大先輩であり、波瀾万丈の生活経験のある雅治さんの話は興味深く、魅力的だったことでしょう。息子たちだけではなく、姉の子ども達などの、多くの甥や姪にも慕われていた、まさに雅治さんの人徳によるのであろう。

雅治さんは素敵な観光案内人でもあった。私たちが学会で滞在していると学会が終わるのを待って、市内や近郊の、とっておきの名所や旧跡を案内してくれた。誰もが行く場所ではない特別のところである。雅治さんは行く先々で、分かりやすい、いろいろな説明をする、実に博識ですばらしい観光案内人だった。いま、私は弘前で観光案内のボランティアをしているが、雅治さんを見習って、同行する人への気配りや、その人の興味に添って話をしようと思ったりする。

雅治さんは年賀状を、毎年、宛名を手書きし一言添える。一昨年は「春スキーと白神に二人（恵子と）で行きたい」と書いてあった。その津軽や白神を訪れないうちに、雅治さんは何も言わずに、黙って遠くへ逝ってしまった。「こわいお姉さん」が「逝ってはいけない！」と怒る間もなく、引き留めることができないうちに である。別れの言葉は言いたくない。これからも、今までどおり、「京都のほうに雅



治さんはいる」と思っていたい。そして、私たちが白神を訪れるときには、雅治さんの心を一緒に連れて行きたいと思っている。白神は大自然の豊かなところ、お互いに何も言わなくても…通じ合える、そう信じている。

## “雅治おじさん”

片桐 健治

（展子 長男）

小さい頃、よく京都のうちに遊びに行かせてもらいました。聞き慣れない関西弁が新鮮で、寺田家に行くのは本当に楽しみでした。あるとき、私は具合が悪くなって寝込んでいると、おじさんは「シンドインカ？ しんどいんか？」と声を掛けてくれました。東京育ちの少年はその言葉の意味がわからなかったのですが、その日のおじさんのやさしさとあたたかさを思い出しました…

“雅治おじさん” おじさんに「シンドインカ？ しんどいんか？」と声を掛けることもなく逝ってしまいました…

遠くロンドンから、ご冥福をお祈りいたします。

## 愉快なおじさん

片桐 伸也

（展子 次男）

京都に行くときは新幹線に乗れる。東北新幹線、上越新幹線もなかった幼い頃、車に酔い易いのに、私は京都へ行くのが楽しみだった。新幹線のほかに楽しみなことの一つが、煙管から「煙の輪っか」を作ってみせたりする、愉快的な叔父さんに会えることだった。

あの泣き虫先生で有名なラグビードラマ「スクール☆ウォーズ」を初めて見たのも京都の叔父さんの家だった気がする。私は早稲田学院高等学校でラグビー部に入った。大学を卒業後も、休日は母校のラグビー部のコーチに出かけ、今は、ラグビーのレフリーをしている。もし、あの時、京都に遊びにいっていなければ、このスポーツに関わることは無かったかも知れない。

就職し親元を離れての和歌山勤務となったときにも、イヌ（コーデイ）だのウマ

(競馬場が近かったので)だの何かと理由をつけてよく遊びに行かせてもらった。「大文字」を見に行き帰れなくなり、夜中に押し掛けたこともある。

一昨年末、花園でのラグビー帰りに京都に寄ったのが、まさか最後になろうとは…。新社会人のお祝いとしてご馳走してもらったお礼をいつかしたいと思っていたのに、結局できなかつたことが心残りである。

## 雅治君との思い出

片桐 康雄

雅治君との出会いは展子の姉夫婦、斎藤繁・節子さん宅だった様に思う。昭和40年3月、恵子さんと二人でスキーに来たときと記憶している。当時の斎藤家は弘前公園の中にあった。弘前大学教育学部の職員住宅だったが、現在は弘前城植物園となり当時の住宅の痕跡はない。雅治君は初対面の私に丁寧な挨拶をされて、山男と聞いていたが、なかなかの紳士だとの印象を受けた。恵子さんは未だ学生で結婚前の二人はきらきらと輝いて幸せそのものだった。昭和41年、恵子さんの卒業を待って、二人は信州の山小屋で結婚式を挙げた。山小屋での結婚式と聞いて、ニッカ・ボッカの山男と山女の結婚式だろうと思っていたが、後で展子に見せられた記念写真には、純白のベールをまとった花嫁衣装の、清楚な恵子さんが映っていた。翌42年の正月、十和田市の三戸家で雅治君と恵子さんの結婚披露宴が開かれた。十和田市の親戚に配慮しての宴だった。私と展子は結婚の約束をしていたが、私が未だ大学院の学生の身で式などは考えてもいなかった。ところが驚いたことに、雅治君・恵子さんの披露宴に合同で、我々の婚約披露も開いていただくことに急に決まってしまった。三戸家のゴッドマザーのトキハママのアイデアであろう。襖を外して8畳2間と6畳を22畳の大広間にして、30名を越える親戚が集まって大宴会が開かれた。上座に座らせられたのが、雅治君を中心に斎藤兄と私だった。お嫁さんの恵子さんや、展子、節子姉は最初に顔を出しただけで、台所で宴席のお膳の支度に回っていた。東北の男たちは酒豪ぞろいである。来賓の酒に付き合うことができたのは、ひな壇の3人の婿さんの中で雅治さんだけだった。難解な方言を話す三戸家の親戚の人たちと如才ない話術で、朝まで飲み明かしたようだ。三戸家で寺田株が一気に上昇したのに対し、学者商売でカタブツの斎藤兄と私の存在感は低落したのはいうまでもない。



その後、我々も東京で結婚して二人の子供に恵まれた。私の父が第2の人生を八戸で送っていたこともあり、毎年、お盆の頃には青森に帰省するのが恒例だった。我々だけではなく三戸家には孫たちが勢揃いした。弘前からは斎藤家の雪江ちゃん、祐一君、寛之君、巨章君、東京からは我が息子の健治と伸也が、はるばる京都からは寺田家の岳嗣君、晶子ちゃん、友子ちゃんが、三戸家の末娘の真理子さんは嫁ぎ先の群馬県伊勢崎市から夫君の隆英君の運転する車で美保ちゃんや勝彦君、裕美ちゃんを連れて、それぞれ帰省してきた。三戸家は孫たちの全員集合し、それはそれは賑やかになった。それだけの大人数を宿泊させることができる三戸家は、今にして思えば、何と豊かな包容力を有していたのだろう。芳夫父もトキハ母も大勢の孫たちに囲まれてどんなにか幸せだったことだろう。恵子さんの弟は2卵性双生児の勇夫君と武夫君である。勇夫君は京都で雅治君に公私ともに世話になったようである。武夫君は十和田に残り電鉄会社に勤務しながら実家を継いでいた。奥さんのユキさんとの間に雅明君と博樹君がいた。武夫君は電気や機械に強く、その頃、流行っていたインヴェーダーゲームやパックマンなどの大型ゲーム機の故障した廃棄品を貰い受けて修理し使えるようにしてくれた。夏の間、三戸家は正にゲームセンターと化し、子供たちだけではなく大人もゲームに熱中して遊んだ。また、揃って車に便乗し、小川原湖のシジミ取り、野辺地海岸の海水浴、十和田湖や奥入瀬など武夫君の案内でよく出かけた。そんなときは、いつも、よく面倒を見て遊んでくれる雅治オジさんは子供たちの人気の的だった。子供たちの記憶にシジミ取りや海水浴の思い出が残っているのかは不明だが、雅治オジさんの優しさが脳裏から消え失せることはないと思う。我々夫婦も息子たちも関西方面に出かけるときは、京都の寺田家に立ち寄ることが多く、その都度、京都の隠れた名所をご案内していただいた。鞍馬山の静寂、北山杉の凜とした美しさ、光明寺の燃えるような紅葉は雅治君の思い出とともに生涯忘れることはないだろう。

雅治君、本当にお世話になりました。心からのお礼を言います。安らかにお眠りください。



## 追悼 雅治ちゃん

岡田貴代子

雅治ちゃんは父方の従兄です。

三姉妹の私にとって、7才年上の雅治ちゃんがお兄さんでした。

思い出すことの一番は、昭和30年代の結婚式と言えば、親族一同が集まるのがお決りのスタイルでしたが、学部部の紅一点を射止め（略奪かも）信州の山で両親と親しいお友達で式を挙げはった事です。

「物凄い、ええなあ…いつか私も…」と思いました。

そして、我が家に大きなまあるい目をした可愛い可愛い着物姿の恵子さんと満面の笑顔

で挨拶に来はりました。

今でも鮮やかに思い出します。

雅治ちゃん、高いところから見ててな～



## 最愛の父の死

寺田 岳嗣

(長男)

報告したい事あるんだ。

相談したい事があるんだ。

見せたいものがあるんだ。



親父…

世界で一番尊敬していた人。

大好きだった。

死ぬには早すぎる。

でも今はこれで良かったと思うようにしている。

もちろん、伝えたかった言葉も思いもいっぱいあるし本当はもっと…

何処に行っても、親父のことが思い出される。

一緒に通ったよな、こんな話したよな…

そんな時、胸の奥が苦しくせつなく悲しくなる。

死は皆に平等に訪れるもの。

人は必ず死ぬし、形あるものは、何時かは壊れる。

そうなのであれば、ヒマラヤという一番の思いを果たせた今、まだ元気で自信のある強い父のままあの世に行ってもらってよかったと思う。

親父は年を追うごとに、老いに対する恐怖が凄かった

“あんな～、岳嗣、老いるという事はとても悲しい年々記憶力が低下して、体が思っているように動かなくなるんだ”

そう言って悲しそう顔をしていたのを覚えている。

もし、親父がボケ始めたら…

癌で痛み苦しんでいたら…

見ているだけで辛かっただろう。

はたして、俺に耐えられたらどうか…

そう考えると、最良の死に方だったと思う。

そして、

“後はがんばれ、岳嗣大丈夫や！”

そう言ってくれているような気がする。

変な言い方かもしれないが、皆の為に人生最大のチャンスでの死に方…

最高の幕の引き方ではなかったのか？

そう思われて仕方が無いのである。

誰にも負担をかけず、家族に愛されながらの幕引き…

これが数年前でも数年後でも違ったと思う…

なにより、死に顔が穏やかだったのが嬉しい。

本当に寝ているようだった…

山が大好きで、

山で結婚式をあげ、

山に始まり、

山で終わり

息子にまで岳嗣と命名し

そして終焉の地は生まれ育った大好きな京都で…

誰にも迷惑をかけず、本当に立派な最後でした。

親父！ 本当にありがとう！

後は任せてくれ、頑張るから。





## 僕のおじいちゃん

寺田 匠

おじいちゃんは寺田家の大黒柱で常に寺田家みんなの事を気遣ってくれていました。

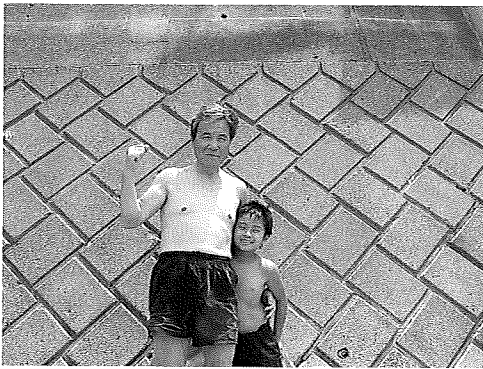
そして強くて面白い人でした。

でもそんな大黒柱のおじいちゃんはもういません、  
そしたら残された人達が協力してがんばっていくしか残された人達にすべき事は無いと思います。

なのでみんなで協力してお互いを気遣いながら楽しく強く生きて生きていきます。

なので心配はしないで下さい。

今まで本当にありがとうございました。



## ロスアンジェルスの中から

サルヴィティ 晶子  
(長女)

まず始めに父のためにこの追悼集を編集してくださる皆様に大変感謝しております。父の最期を共に登山していた人達には、いろいろお話を聞きたいと思っていたのでこういう機会をつくっていただいたことに大変うれしく、自分たちではなしとげられなかっただろうことで、感服きわまりません。ほんとうにありがとうございます。私からは、娘から父へのメッセージとして、父に捧げたいとおもいます。

お父さん、おじいちゃん、マー君、本当に素敵な優しい大きな愛をもった父でした。いまだに電話するとお父さんが、「おお、晶子か？」って電話にできそうで…本当にたくさんのあふれんばかりの思い出をありがとう。We miss you so much !!

まやといっつも「でこまや!」「でこじーちゃん!」ってやりあってたのがもう見れないかとおもうとすごく悲しくてさみしいわ。サイコーのお父さん、そしてサイコーのおじーちゃんやったもん。最後まで大好きやった山に登って、そのすごく高いアンナプーラの山よりももっと高いところにのぼっていったんやね。小さい時から連れて行ってくれる所は、遊園地よりも山やったもんね。山でのランチにおはしがなくて時は、木の枝をおって、それを削って作ってくれたお箸でたべたカップヌードルの味が忘れられへんわ。そんな中から人生のサバイバル精神や自然の偉大さ、美しさを体験を通して教わった様に思います。ありがとう。家族第一やったお父さん、いっつもみんな一緒の家族旅行は数知れず、それは、私が結婚してからも、まやが生まれてからも実家に帰る度に続いて。必ず無理してでもどこか連れて行ってくれたもんね。去年の夏に急に豚インフルエンザで安くなった飛行機代のおかげで本当は、次の年にでものぼそうかと思っていた実家帰りが実現して、その時に連れて行ってくれた思い出の東尋坊、三国への旅はひと際心に残るものになりました。本当によかった。ロスにもたくさん来てくれて、お父さんは、結婚した時もお店を始めた時も、まやが生まれた時も、私の人生の一步一步をつねに一緒に見守ってくれていたと思う。日本で近くにいるよりも返って、近い存在やったんかなあ。これからは、上の方から見守ってな。

去年の夏にずーっとお父さんに見せたかった、念願の国立公園の数々、モニュメントバレー、グランドキャニオン そしてレークパウウェル 出のキャンプが出来て本当によかったし、一生に残る思い出となったわ。キャンプファイヤーの周りを



まやと一緒にインディアンダンスしてる姿も脳裏にやきついています。お父さんの感動ぶりを見るとジョンも今度はヨセミテやイエローストーンに絶対連れて行きたいって思ってっけけど…その分お母さんといってくるしな。

本まに子供思いで孫思いの人やったね。私の一生忘れられないお父さんとのエピソードは、中一の時、あの時大好きだったアルフィーの初コンサートチケットを友人と女の子二人で徹夜して取りに行くって言ったら、ふつうなら反対する所を「俺と一緒にやらんでやる！」って駐車禁止のチケット売り場の前にでんっと車をとめて、夜中中、エンジンかえたままでヒーターを利かせた車の中で私達二人をねかせてくれて、自分は、一晩中他の若い女の子たちに、「おっちゃんダフ屋？」って聞かれながら並んでくれて、娘のためにチケット取りに並んでいる父親だと知るとそのこ達は、声をそろえて、「おっちゃんかっこいいー」って言ってたってよく喜んでおはなしてくれたやんね。あの時早朝に交代したあと、さりげなくマクドナルドの朝食のホットケーキセットを買ってきてくれて、あの時の発泡スチロールのお皿に入ったホットケーキの味は一生忘れへんわ。お父さんがマクドナルドに行ってくれた事だけでも驚きやったのに。未だにそんなお父さんは本まにかっこよかったと思います。お父さんに会うたびに「あれだけは、本ま、感謝してるわー」ってつねに感謝の気持ちを表してきてよかった。アメリカに来て、アメリカ人のジョンと結婚して、アメリカナイズされた私は、常にお父さんとの何度もの再会、別れの度にハグ（抱擁）してこれてほんとによかった。素直に感情を表すことは、いいことやわ。

コンサートと一緒にいく機会は、なかったけど、時代劇の好きやったお父さんとあのころこれまた好きだった京本正樹を見るために一緒に京都南座での夏の必殺まつりも一緒にいったやんなあ。お父さんとの思い出話はずきませんわ。

そんな自慢のお父さんは小さい時から私の友人達からも「おっちゃん、おっちゃん」って親しまれてて。去年の夏にみんなが集まったあとも昔と変わらず一人ひとりの家まで送ってくれたもんね。お父さんに出会った人は、きっとどの人もそのお父さんの寛大さと優しさを感じてたとおもうよ。

お父さん、私達家族にたくさんの愛をそそいでくれてありがとう。お父さんがいなくなった今は、毎日もっと身近にその愛を感じています。目を瞑るとお父さんのガッハッハって笑い声や、が聞こえてきて、まやとやりあってる姿が目映るわ。もう一言喋れたら…っておもいは、一生続くんやろうね。いつまでもいつまでもお父さんを心に。最愛のお父さんへ

晶子

## 大好きな Oto-sam

ジョン サルヴィティ  
(晶子の夫)

Masaharu Terada means so much to me and all of his family in America. He is Oto-san, Oji-chan, Dad, Grandpapa. I hear his voice, John-san he would say, or my wife, Keiko, or my son Takeshi, daughter Yuko and Shoko and of course his grandchildren he loves so much. Conversation about family or friend could be short or sometimes go on until well into the night. That is here I truly learned to enjoy the taste of a simple glass of wine. He cared about others more than himself and that family and friends were doing good, he wanted us to enjoy life and live to the fullest, and in return that was his enjoyment. His trips to America, and my trips to Japan are all locked in my heart and spirit forever. I never felt like a Gaijin around Oto-san or his family. I truly felt like a son or brother and I am proud to say this. If anything perhaps at times I made him feel like a Gaijin but he never cared. He was patient with me and so I learned patience in watching him. One shy moment was when he taught me the right way to take a public Onsen, yes a bit embarrassing for this fella from Boston that had never been in a public bath with even my very own father butt naked. Oto-san lead the way, I just followed. It felt like a lion with a cub and I wouldn't change a thing. I just wish I could have ome more Onsen with you Oto-san. We struggled at times we managed to understand each other. Fanny, it was always easier to understand him when he would talk about two subjects in particular, nature or his family and friends. Nature and his family I truly believe he loved more than life itself. He and his family taught me and my wife continues to teach me this nature thing and my little 6 years old Maya, she too learned this from her Oji-chan.

I am so happy that he went out of his way to be a part of my family in Boston. He met every family member of the Salvittis including of course my mother and father and although I know this wasn't easy because of language differences. He tried to understand who everyone was and really enjoyed getting to know everyone. He loved my mom's Italian eggplant parmegiana. I hear it all the



time from my family members at different conversations but they all know this was one heck of a good may. In fact of course they say the same of all Teradas. They are so happy to have met Oto-san's family. I myself am waiting patiently to see Shoko's family again soon and I can't wait to hug my Mom in Japan Keiko.

Thank you Oto-san for being my father in Japan. I know you're still teaching me things from Heaven and looking out for us all as you climb the mountains and explore the nature of the universe. I can see you smiling and hear you singing folk songs with the angels. I love you. We love you. God bless you Oto-san.

P. S. Thanks for accepting me as your daughter's husband. You are forever my father in Japan.

John Salvitti

寺田雅治とは、私やアメリカの私の家族にとっては、大変意味深い人です。彼は、お父さん、おじーちゃん、ダディ、そして、グランパでもありました。今もお父さんの「ジョンさん、マイワイフけいこ、マイサンたけし、マイドウターゆうこにしょうこ」、そしてもちろん、彼がだいすきだった孫たちを呼ぶこえが聞こえます。お父さんとの、家族そして友達の会話は、時には、みじかくそして、ときには、夜遅くまでになることもありました。そんな中から、グラス一杯のワインを本当に楽しむ喜びを教わりました。お父さんは、いつも自分のことより、他の家族や友達が元気でやっているかを気にかけ、いつも私達に人生を思いっきり楽しんで生きていくことを願い、その代わりに私達が楽しんでいるのを見るのが、お父さんの喜びでした。お父さんのアメリカへの旅、そして私の日本への旅の思い出は、一生私の心と魂にしっかり刻まれています。

お父さんや家族のまわりでは、自分が「ガイジン」と感じたことは一度もありません。本当に息子や兄弟の様に感じさせてくれました。そして今、こう言えることを誇りにおもっています。たぶん、どちらかと言うと自分のほうがお父さんに「ガイジン」と感じさせるようなことをしてたかもしれないけど、彼はそんな事はまったく気にしてなかったようです。私に対してもじっと辛抱強く見守ってくれて、お父さんを見て辛抱強くすることを学びました。

お父さんと初めて出会っての家族旅行で、すぐに温泉にいったことは恥ずかしいながらも楽しい思い出です。今まで一度も公衆のお風呂なんて入ったことのない、しかも自分の父親とも入ったことないこのボストンからやってきた若僧にとっては、すっぽんぽんでの温泉は、はいっ、それは、ほんの少しはずかしかったです。



お父さんが先導して、それにただ私は着いて行っただけでした。ライオンの子供がお父さんライオンについてい行くような感じでその関係は、ずっと変わってほしくないものです。本当に後もう一回お父さんと一緒に温泉にいけたらなあって切実に思います。時には、大変な時もあったけど、お父さんと私はお互いをすごくよく理解することができました。おもしろいことに、特によーく理解できた二つのことがあります。それは、お父さんの友人、家族のことそして、自然です。この二つのことがお父さんの人生の中でなによりも、その人生そのものよりも愛していたことだったと私は本当に信じています。自然のことは、お父さんとその家族に教わり、私の妻がそれを続け、私の6歳の娘もこれをおじいちゃんから学びました。

私は、お父さんが私のボストンの家族とも無理をしてでも接してくれたことを大変うれしくおもいます。お父さんは言葉の違いもあり、大変だっただろうにもかかわらず、私の両親はもとよりサルヴィティ家のみennaと会っています。お父さんは、一人ひとりを知ろうとしてくれて、みんなと出会えたことをよろこんでくれました。私の母の作った、イタリアン エッグプラントパルメジャナを大変気に入ってくれました。いろんな私の家族の人と話す度にみんなお父さんがどれだけすばらしい人だったかをわかっていれています。実際のところそれは、寺田家のみennaにあてはまるのですが。私の家族のみennaは、お父さんとその家族に出会えたことを大変よろこんでます。私自身も今度、しょうこの家族のみennaに会える日を心待ちにしている、日本のお母さん、“けいこ” にあって、ハグ出来る日が待ち遠しいです。

お父さん本当にわたしの日本の父でいてくれてありがとう。おとうさんが天国からいまだいろんなことを教えてくれていて、高い山に登って宇宙の大自然を観察しながら私達みんなを見守ってくれているんですね。お父さんが笑いながら、天使たちと歌をうたっている姿がめに浮かびます。I Love You. We love you. God bless you Oto-san. (お父さんに神のご加護がありますように。)

## まやからおじいちゃんへ

サルヴィティ まや

おじいちゃん、だいすきだったよ。セーフのゲームいっしょにやったのおぼえてるよ。(日本の部屋にある蛍光灯のひもととびついて、ひもが電気にひっかからなかったらおじいちゃんがまやに「セーフ!」っていう二人で2009年の夏休みにあ



そんだゲーム）またあそびたいな。おうちでおじいちゃんとまいにちいっしょにねてるよ。おじいちゃんのしゃしんにいつもキスしてねるよ。きょうのよるもそれやるのよ。おじいちゃんと本よみたいな。おじいちゃんはほんとにHappyなひとでした。

またこうえんいきたい。

おじいちゃんと、とうじんぼう、こちょうもんにまたいっしょにいきたい。

おじいちゃんといっしょにレークパウエルのキャンプファイヤーでいっしょにインディアンダンスしてたのしかった。マシュマロをたべておいしかった。さかなもいたよね。

おじいちゃんはぜんぶすきだった。

キキとすもうもおじいちゃんといっしょにさんぽにいきたいよ。

おじいちゃん、とうじんぼうでラムネあけてくれてありがとう。まやはおじいちゃんのこといっしょうおほえてるよ。

おじいちゃんとまやめがねあるよ。

おじいちゃんまやがおおきくなるのずっとみててね。まやがときどきしゃしんのおじいちゃんとあそぶしダンスするよ。



## 父の愛唱歌…春寂寥

西川 友子  
(次女)

この度は父のために追悼集を企画してくださり本当にありがとうございます。  
父の最期の旅となってしまったアンナプルナの報告書と一緒にこのような形で収

めていただき私たち家族にとっても素晴らしい記念となります。

寺田家はあの元気な父と母がそろそろ賑やか過ぎるくらいの家です！

毎晩のように酒盛りが繰りひろげられて時には夜中2時まで陽気な「春寂寥」が寝ている私の部屋まで響いてくることもありましたが！ 父の歌声は大きな声でよく通るんです。

仕事で疲れて寝ている私には到底眠り歌に聞こえず困りました。

また私の友達まで含めて酒盛りをする事もあり、友人が口をそろえて「寺田のお父さんはほんまおもしろいな～」と言うぐらい、話し好きの優しいお父さんです。

人が大好きで私から見ると多少おせっかいな面もあるけれど常に人のために何かしたくて「我（ワシ）がやらねば我（ワシ）がやらねば」と気張るガヤハル（我を治）お父さんが大好きです。

末娘の私は実家にいる期間も長かったこともあり、特に甘く育ててもらったと思います。

最初こそ怒っていたけれど父を「ま～くん」と愛称で呼び彼氏以上の恋人のような存在。

父との買い物・食事は毎度期待を裏切らない楽しみがたくさんあり二人の思い出は数知れず。こんな優しい父なら「私もあなたの娘になりたいわ!!」母が何度か愚痴をこぼしていましたが…それは叶わぬ願い（微笑）

そんな父との甘いエピソードをひとつ。

高校時代、私は新体操クラブに一生懸命取り組んでいて特別練習で帰りが終電になる事もあり心配した父はその都度、自宅京都からは遠い大阪の体育館まで迎えに来てくれていました。

女の子のスポーツだからか遠慮した父、体育館の周りで本を片手にウロウロするものでコーチに怪しい変質者か？と怪しまれた事があり「なんたる失礼な!!」と怒っていた笑い話もあります。そして当時生意気盛りの私は、「来るなら車で来てくれたら楽やのに～」と言うと「バカモ～ン!! ワシが来られない時はどうするんや!!」珍しく叱られ、そして一緒に地下鉄からの乗り継ぎの道筋、ホームではどこのあたりで電車を待つか、車内の座る席は車掌さんのいる後ろに座る事になどほんとうに細かく注意されました。すべては遅い時間に一人で帰る私を心配してのことでした。

そんな父の深い優しさは大人になり嫁いでも変わることなく、それどころか旦那・



子どもも合わせてたっぷり甘えさせてもらい、旦那にも本当の父親のように接してくれてとても喜んでいました。

私達家族が薪ストーブの仕事で独立の意思を固めた時にもすぐに応援してくれての後押しするように力強い言葉をくれました。

大変な時代は、大きなチャンス。  
勇気を出し、生きて行け！  
おとうさん、

最後のカードになってしまいましたが、この力強い言葉・文字に何度も励まされました。

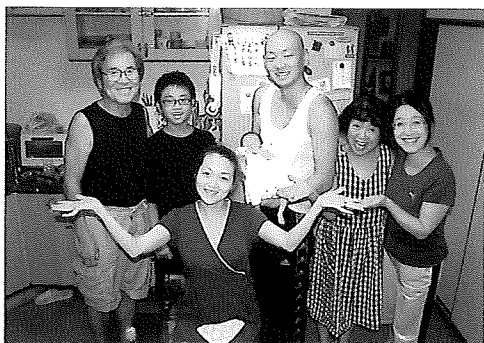
どんな時も力強く肩を押し前に進むことを応援してくれました！

私達、家族は父母から教わったたくさんさんの宝があります。兄は命の水・姉は大地に芽吹く草花・私は自然の

ままを材料とした暖かい炎を！

私の生活の中にも当たり前のように父から教わった山と自然、人を愛し大切にす  
る根が生え心の中心となっています。

こうした父が残してくれたものがたくさんあるので胸は痛むけれど寂しくはありません。



きっとヒマラヤより険しく高い山の彼方で、かねてからの友人と肩を組み、あの大きな声で歌う「春寂寥」が聞こえるようです。

アイン・ツバイ・ドライド

## 逝ってしまった貴方へ

寺田 恵子

“春寂寥の洛陽に…” 夫雅治がこの歌で見送られてから、初めての春を迎えます。このたび雅治の追悼集を・とお声があり気持ちを整理しながらすすめる事ができ

ました。皆々様にも多大なお心遣いとお手間をおかけして…心からお礼を申し上げます。

思えば、この歌、彼と共に又、沢山の仲間の方々と酒を飲みながら、何十回、何百回と歌った事でしょう！ 今もそばにいるような気がして“ホーラ又始まった…”と肩を叩きたくなるのです。

信州大学時代、上高地で出会ってから、47年、喜びも悲しみも共に歩んで来たのに、この別れの悲しみは、もう、分かち合うことは無いんですね。

よき先輩であり、よき夫、よき友、時にはライバルであり、敵(?)でもあった雅治との思い出は、数限り無く、言葉に尽くされるものではないのです。今、心のよりどころとして、この空の何処かにいる…雅治にむかってほやいて見ようと思うのです。

出会い…あれは大学2年の夏、ワンダーフォーゲル部の立山縦走の際立ち寄ったサマーテント。ナントオゾイ人達…中で一段とオゾイ変な人…それがあなたでした。

“勿忘草をあなたに…”の歌を歌いながら、背丈より大きなキスリングを背負う時、手を差し伸べてくれたのに…「イインデスッ」と断った私、生意気な、かわいげの無い…それが最初の出会いでしたね。

私が卒業するまで2年間の遠距離…大学の内萱ヒュッテでの結婚式。山岳部とワングルの仲間が泊まりこみで、その夜雪が降り、皆で“デカンショデカンショード”とストームして雪の中を踏み出したっけ…当時の造林の教授がよくよく許可され、参加くださったものですね～（先生、感謝しております）京都の両親、青森の両親も“あの結婚式はよかったな～”と折にふれては話していたっけ。その私の両親、お義父さんも今はなく、そちらでの再会をすませていることでしょうか？

仕事…「本当は、俺は地質の学者になりたかったんや～」そう言い続けていましたね。

石や土をいじりながら…もちろん山も登り続けたかったですよ！！

卒業後就職した道路舗装会社が3年で倒産。その後は、何一つないながら、自力で会社を…と必死でいろんな手立てを講じましたね。（そのとき、長男1歳でした）

最初は、試験室の経験を生かし、舗装のデータ作成業、測量、スコップほりから始めた外構工事、又ある時は、ゴルフ場への出稼ぎ？ 2年…造園、舗装、又切削会社等々設立しては、閉じの繰り返し、順風満帆という訳でなく、厳しい時もありましたね。

時には夜叉のごとき、仁王のごとき“男のロマンや～”と言いつつ頑張り通して



来ましたね。長女、次女と子供も3人となり、父親としてより責任感を深くしていただきましたよね。

切削機械の買い付けに、ヨーロッパ、アメリカと飛びまわり、仕事上でのお付き合いも忙しく、5時から仕事も毎晩のよう、あの頃の酒、タバコ三昧とメタボ、体も心も大変だったでしょう！。他方、地域での、自治会長や体育振興会長、京都ライオンズへの参加など人のお世話にも一生懸命で…そんな多忙な中、暇を見つけては、近郊の山々を歩き、何度か家族でスキーに出掛けるのを楽しみにしてましたよね。骨折などの武勇伝？ 旧信大ヒュッテでの、“硫黄のタタリ”や、食堂での酔いツブレ事件など等…フレンズ岡崎の猛さん、美和子さん本当にお世話になりました！！ 懐（恥）かしい思い出です。

転換…10年前、3度目の会社倒産。整理が就くまでの2年、今の家を離れ、犬と共に二人借家で過ごし、じっと嵐の過ぎ去るのを待つ…そんな生活でした。

京都を出るときの緊張感と不安感は、今でも涙のにじむ思い出…そんな事を話そうものなら生前ならば、「倒産ではない！ 整理や〜」と大声が飛んでくるところよね〜

なにより心に残る事、今は亡き小川さんの雪の別荘での1月近くの生活。ストーブに薪をくべながらじっと火を見つめていた貴方…そんな折、小川さんが見えられ、酒を飲み交わし、足つぼマッサージしてくださった事、つい昨日のように思い出されます。

切ない寂しい…怒涛の人生の中、戦士の休息…きらきらと光る星のようなひと時でした。勝さん、よしゑさん有難う！！ その時お世話になった沢山の方々感謝感謝です。

山再開…自然がすき、山も海も花鳥風月なんでも大好きな我々は四季を通じて山菜、茸採り、海では泳ぎは勿論、魚釣り、素もぐりで、あわび、サザエ採りなどしましたね。

特にこの10年間、二人で、時には愛犬と、西山、北山、滋賀の山、そして学生時代の復習しながら信州アルプスを歩いたものです。トレーニングも自分でメニューを作り、毎夕、犬の散歩を兼ね、片足3kgづつの重りををつけて1時間、帰ってから、サーキットトレーニング、バーベル、腕たてふせなど1時間などこなしていましたね。特にヒマラヤの話が煮詰まってからは、鬼のような顔で頑張っていましたね。（横から話しかけられないほど…）体重も20kg位絞込み、心配げな私に、“これがベストや” 聞きいれませんでしたよね。山に懸ける思いは流石やな〜と感心したものです。

帰らず…そのヒマラヤからは、「今関空、これから帰る」の電話の声だけで、家には帰ってきませんでしたね。「どうしたの!?!」貴方にはそれしか言えませんでした。

…でも、現実…貴方は一生懸命生きて、沢山の人と交わり、沢山の思い出を残して、逝ってしまいました…若かりし頃よりの夢、ヒマラヤでの旅を終えて…

今でも、夢の続きで自由に世界中をトレッキングしているのでしょうか？

残ったもの…貴方は、山や海の自然がすき、そして何より人が好き、友達が好き…いろいろな方々と交流の輪を結んで来ましたよね。近年は“同窓会屋”と言われるほど、小、中、高、大学…等の幹事を受け持ち、又「…君、元気かな～？ 会いに行かねば…」が口癖のようでしたよね。何人かの友人との思いを果して…何故か、早く逝く事を予感していたような…あまりに急ぎ過ぎましたよ。

家族に対しても愛情一杯で…“かまいたちと”云われるほど、人一倍、かまい続けて、親戚、身内、皆の大黒柱だったのに…残されたものは、これからどうするの？…寂しさとやりきれない思いも残ります。

数々の思い出と宿題を残して逝ってしまった貴方、今は、子供達もしっかり前を見据えて頑張っています。生前に、伝えきれなかった一教え一が活着ているように思われます。

近年、仏教への思い深く、二人して、数々のお寺めぐりしましたね。よく冗談に“俺は釈尊雅だっ”なんていっていたのに、本当に“仏の雅に”なってしまっ…

雅治さん　たくさんたくさんの思い出有難う。  
人生、一緒に歩んでくれて有難う。  
私は幸せでした。

残されたものたち、しっかり、手をつないで生きていく事を  
空の彼方から、見ているね。

別れても 別れても心の奥に  
いつまでもいつまでも 覚えておいてほしいから……  
忘れな草を 貴方に 貴女に



### 春寂寥

1、春寂寥の洛陽に  
昔を偲ぶ唐人の  
傷める心、今日は我  
小さき胸に懐きつつ  
木の花陰にさすらへば  
あはれ悲し逝く春の  
一片毎に落る涙

4、嵐は山に落ち果てぬ  
静けき夜半の雪崩れ  
楯の火赫くさゆらげば  
身をうち寄する白壁に  
冬を昨日の春の色  
あわれ床し友どちが  
あかぬまどあるもの語り  
あかぬまどあるもの語り

思誠察察歌